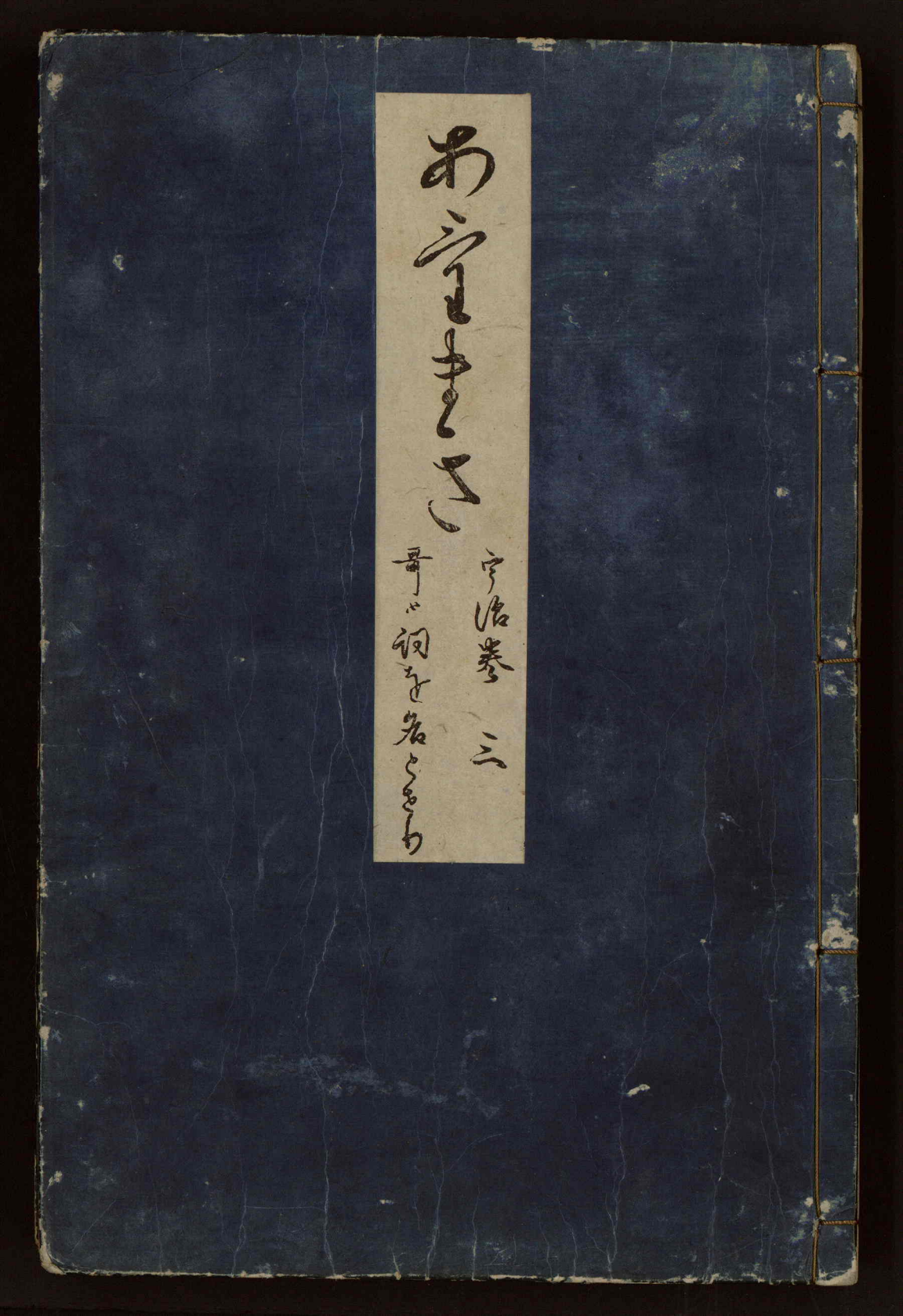


# あ宣まるさ

宇治巻　三

哥ゝ詞を名とせり

[v.47]

PL788
.4
.G4
1654
vol.47
copy 1
Asian
Japan
Case

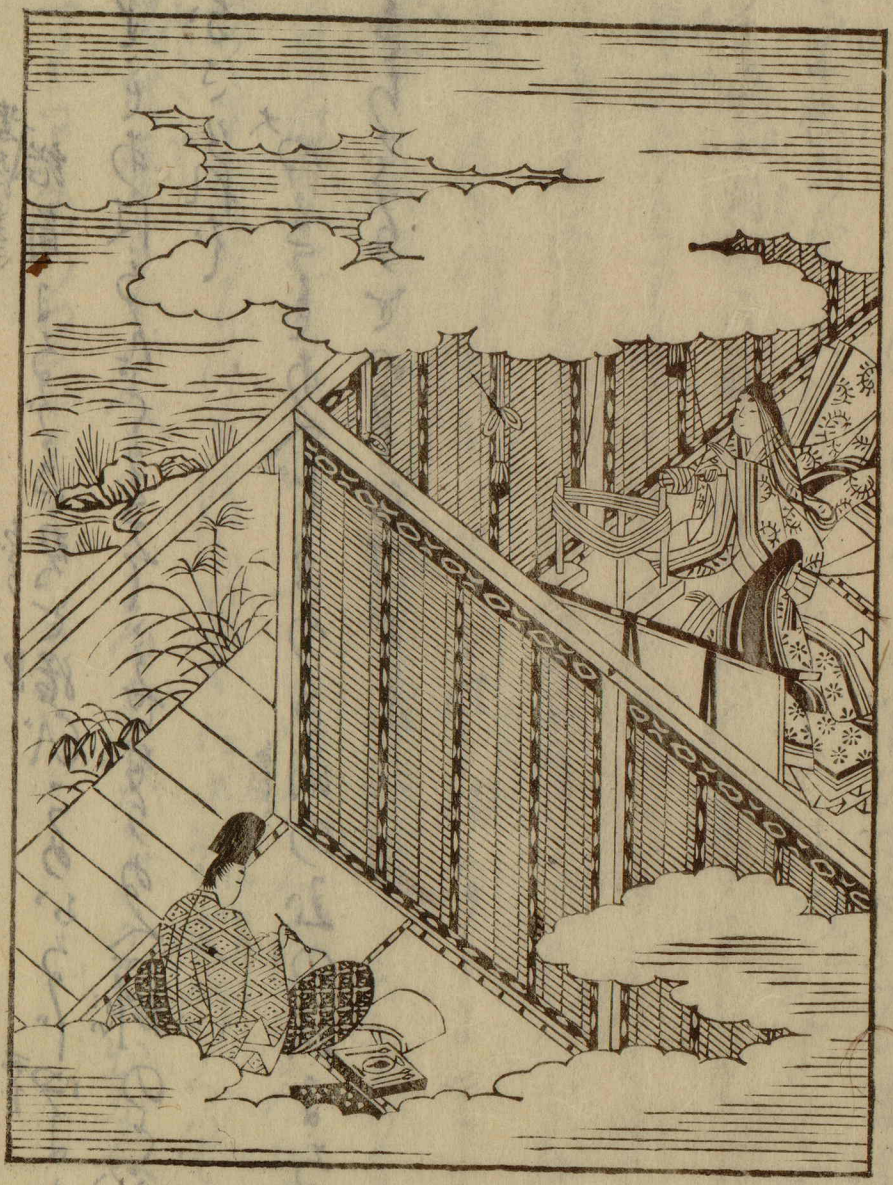
2004551382

菫 廿七才の秋より冬まで書

あまたとし。こゝなれ給ふし。川風(かハ毛)もこれ妹(あき)にいと(姫宮ハ)
もしたるく。もれがるしらて。れ(八一回忌ノ事)ちてのこといそがせ
給。大かたのあるべかしきことどもは。中納(菫)てどれ。お
ざりなんつうまつりたまひけり。こゝ(姫達)まはほうぶ
くのこと。程(きやう)のうざり。こ夜かたまれあけかひを。人の
きこゆるまさるがひて。いとなき給も。いとものも
かなくあられまかくなよ(菫ノ事)そのれうしろこなるら
ましかばとこゝろ。こづ(菫)ろもまうでゐて。いま
もとぬぎ(服衣ノ事)すて給ほどのれとゝひあきかしぎき
こゝ給。おぎりもこゝ(姫宮へ之)に来れり。こゝやう(名)がう(香)れいとひ(糸)
きこゝぶりてがくてもへ(姫宮達詞)ぬるなどうちかたひ給ほど

ありけり。むもとびあげたりしに、里のすぐれのつまよ
里。本性のかたころびにすさそこしなれば、その（薫）ことく心
えて、門が泪をば玉にぬりなんとうちずじ入る。
伊勢（せ）のごもかうしそいありけめと、おかしうさこ
ゆるも。うちのひとはこさしたりがほにさしいら重
たまたんも門にましうて、あれとは（姫宮）なしにやらか。
貫之（つらゆき）がこれ世ながらの副（まれ）とぞ。心ばそきすぢに
ひきかけそんをなぐげにふることぞ。人のこころを
のぶるたりありけるは。いで給。此（薫）彰文（ぐんもん）門くるも。
理佛供養（きやうをけく）ぞしるべきこころぞ人なぐうき出かへ
なすぐ里のつゐでにましふと

葉あげまき
総角まるがき 契(ちぎり)を結(むせ)びこめおるじ心(ゆく)まま
まともあはるんどうきてこせなりぬへば例(れい)のとう(大ん)
ふさられば
大
ぬきもあへぞもろき洞(あなぐ)の玉の緒まるが
きちぎりをいかゞむすぶん



とあれど。おはぎいかほどとうしめしげなり（蓮阿）
ながめ給ひ。（蓮心）げうらのれうへいかくそこともなか
くまてそちてだい（大ノ）げうしげなりますりくとも
えの給ふとて。（白）文のれこそでまのやうな字し
給。（蓮阿）ひしを心なりかまじきこと候ふやうのことなる。
すこしすこしもつへるれなど（かんじやう）よりて。字えぞあ給ひん。
まけじと度しおまやく。ござ度らうござ度まいと
ようなん。此氣色（けしき）こそけう度こともうしろめくうれ
おりまじげなる候。なぞくうけがちもしきまそ
ちそれなつへん。よれ有様（ありさま）ながおはしつくまじくなれ
とう給（えまろ）しめなをごうそと候ふくもの。こなそなさせ

ぬへばかばかりうしをくこれをこそしゆうろろかり
さがひてうしめしくなん。どもかくもおぼしつく
らんさ夜など候。さはやうまうけ給ちりましがれと。
いとまめごちて罪しぬへば。大河ぐへ罪しじの心をてこ
そいかうまでおやしきよれこめしなる官様をて。
ぐそなくもてなし給れ。それを覚しつかざりけり
とそいおさきことをまじつまうろうちすれ。げま
うるすまねなどは心あらん人いさ(おれ)(のこ)をことは
あるまじき候。何ぞまもをくれそめるけううちは。
これの(莫ノ)給めるすぢいいましへをさしるかけて。と
あらばかしらばなど。(ゆく)(まま)引束のあらましごとまとり

まぎての絵をくこともあそびしかば、あ給ひてかち
さ夜はそ、よづきころ京とむこゆべくおぼしさせて
げりとちん、むかしを給はれば、さもうくもこそてんとる
ほうてぞろいすゑしよごもりころぼどまで、ごやま 光より中宮へ与ると大宮への絵之
ぐれまいころろぐかしうきて絵人(中)のれうへをいも
とろくちさまはもしもてずもがれど、人あはれなぞ
あかりもしうおぼし給はれば、いかなりべきさよろうり
おんとうちちげなそおもれ、むこぐれ絵げ給の
けそひいでゝ哀(あはれ)げ也、げざやうまおもくるびでもいそでん
さらしがりさ夜そらむところりまで、例(れい)のかうくん
めし出てぞくらし絵、筆(ふで)だもしらず後(のち)の世ざ夜の

こゝろざし人までもすこしよりそめしも、がくれ心ばそげる
あそばしかめりしはすゑのよはひらきれはこそくもゝ、
心をまなびてもてあそびしこゝろもべくちらんの給ちゞり
てんど、あそばしときてなり給しはありさまどもも
まなびてはこゝろざし人どものいゝぐおやまくま
まれづけるかはいるまあそばしときは川ぶかうくまな
こゝちるまやさしけりしこゝろさへそひてあそび
それづゝ字つゞく給やすもあんは、とおやまき
かよまそて世中まこゝろどきかるかるなりつるは
さるべきまでやうもまでも字あるはけんぜ人も
やうくいひかみややうあるべきめでま、おぼすじうは。

（むし）
ちの出こともたがへさうらず。我も人も。よれつゝ
心とけて。さてしかはぐやとおもひよるを。つきなる
ゑべきことまても。さやうなるゝあしなくやを
あるなどの給つゞけて。（句）こやの出ことをもかくさう
ゆるまうしろめたうはあらじと。うちとけ給さ海
なるぬはうちくまさりともおもほしむけたる
ことのさ海あらん。程いかまくとうちなが免。川く
のたまへば。（地）例のわろびたる女房（ねうぼう）などはかくることは
ま。まくさきしらもいひまぎて。ことゝなりなど
もすめるを。（弁ム）いとさはあらず。こゝろのうちまはあらま
ほしかるべきことゞもをとせんど。（詞）もとよりかく

人にこがひぬへるはくせどもに侍れば、やいかにも
いかにもこれつゐにおもやかやなどおもひより給
へ分れ童色になるん侍らぬ。かくてさふらふこれかれ
もさしどろごにおもの。これもしげあるこれもとの
かくろ人も侍らざりこさ。三代推がたくおもふかざりに
ほどくにつけてまうでちり。無しのふるさすぢ
なる人もおほくこなりすてこうあたりにまして
いまはしぢしもこちさまりがたげにもひ侍りにお
えしましくよにそうざりありてかたほなるん
はかりさ夜にいとおしくもなどこうざいなるはうる
えしさにおぼしもとぐこほりつれにまはかう

又これはなまさは男どもまて、いかにもくらゝ
なびきなへんをおなぶちまそしつゝ寄れん人は
うへりてもれこころをもしらず、いふひなきこと
まてこそはあらめ、いかなる人かいとかうで世をば
すぐしまてなべき松の葉をすきて つとむな
やまぶしざまいけり男の拵ぐさまよりてこそは佛の
はとしへをもこちくつれてもをこなひなす
なれなどやうのようなぬこと紙寄しきせ、つゝさ
はこころどもこゞれなぬべきことおほく詠めれど、
さまむべくも拙し給ひず、なれ君をなん、いかで
人めしうもあつかひなしなんと思きこし給

七六

べかめるかく山ゆうこづゑこさてしさせ給めるが此
心ざしのさしへてこなりなれぬへるけそひもうと
かしぎしひこさてしさせぬひ今はとき夜かうざ夜に
こ夜かなるすぢにきてしかよひ給めるに此れ中
をさやうにおもむけてこさてし給ちぐとなん
おぼしべかめるこ白やのれゆこなるぐ給めるをさしに
まめくしきれことなるじと給めるとこさ申れば
おもれなるれひとことをこさをきなりにしかば
家の世にかくづらりんかざりはこさてしかよもんの
心あれば心づるにもこしなんおなじことなる
べきぬさまでもるおぼしよるなるいとうれしき

とくなれど心のひ大くなるなんがぢりせひをつる
よりはなほとまりぬべきものなりなればおもしろめ
てさはえせひなほすまじくなんよれつゐまなるよ
びかるすぢまもあらずやこゞやうは物備(つざ)てご
とのこいろさ海ならずさしせりひてどよりくつり
さぶめるさよれ物語をへぐそなく呼んて。つくこ給
ひころのん海ならずもてなし給いんなんとらうら
などのぎやうはむつましき程なるもなくていと
さうじくもくなん世中のせふことのあられまも
おかしうもうれもしうもどさまつけたる有様を
こころまとめてのこゝろ男なれば。さすがはこつざ

なくおぼゆるようとうまじうたれこさしゆる。
明石中文
ささいの文ばかりなれくしうさやうまそこハかと
なさ心のまくなるくらくしさ代男しかるべさ
まもあらず三条のこ女三やハおやと心さしゆべさまも
あらぬれ口くしさなれどうざりあれど。
やすくなれ男しさせずしそのかの女ハすべて
いとうらくつくましうおそろしう覚えて心から
よるべなく心ぼそさなりなる代ざりのすきひまても。
けさうぶちらうとはいとまばゆくあり川りぞ。
もしこなるさこちくしさまてまいて心ましめらる
るのことハ打出ることもなくてうらめしうら

いぶせくも。むさくゆる氣色（くしき）をぶまえしならぬこそ
我ながらうぶりなくうるくなしこそいぎなれ。宮（白）の
れこと我も。さりともあしざ夜にはこそしじと。
まうきてやいこ給ちぬなど。いひぬなへり。おいぐ（并ん）へ。
もるゝ。うぢりうろぼそこまる。おらまほしげなるれ
何りさ夜をいてきちまきも何しせならづやと心へど。
いづるもちつしげなるれ何りさ夜どもなれど。
おもひのまくにはえこさえしず。うらひ（蓋ん）いさまりぬて
抱ぐうりなどのどやかに。罕しまほしうて。やすらひ
くらし給つ。おぎ（蓋ノ）やかなしず。もれうらこがちなる
れ氣宮。やうしくいりなく成ゆけだ。いづ（大ん）らいしうて。

うちとけて笑へ給ひんことも、いよ〳〵くるしかれ
ど、大方まていありがたう、哀なる人の心なれば、こよ
なうともてなしがたうて、對面(さいめん)しまゐほとけのおい
する中の戸をあけて、こあらしの出けざやかり
かけさまて、すぐれは屏風(びやうぶ)とそへてぞおいする、と
まもおほとなぶら氣らすれど、なやましうて(葉詞)ひ
いなるを、おしいはなどいさめて、かたいらふしまへり、
れぐ抱など、けざとはなくしなして氣らせまへり、
れともの人どまも、ゆへ〳〵しきさうなくどして、
いぐさせまへり、らうめいさうなるにお川まりて、此
おまへは人げとをくもてなして、しめぐと物語(ものがたり)

四十九

四十九給。うちさくべうもあらぬもれかしおろしげに
世所（あいぎやう）つきて。猶の給へるさ海のうれめるしぞころに
入て。おいらくもうるましかくほどもうきもれく
へどてどうら後さうりぜころまて。おぼつるくお
つすぐまてころぼそされ。おまりかこがましうも
あるうるくおいげけられどうれなくて。たくさの
世中のことぐも。衰まもおかしうも。さ海ぐ四十前
おほくうらひ四十九給。内には人ぐちうちどの（大ノ）給
をきつれど。さしもまてうるれ給いざらるんとおふ
べかめれば。いとしもまもりきてしずさしまぞき
ひ。これよりみして。佛の御ともしぜもりくぐる

人もなし物(大ん)むつしうて志のびて人めきどおどろ
うぎ(汨)こうちのかきこぶり、なやましう侍るをこゝめ
らひて曉(あかつき)がたにも又笑むとて、いり給なんとする
なしきなり、やまぢ(荒汨)もけ侍りつる人はましていと
ろうしかれどかう笑うけ給ふるにあぐさめてこそ
侍れ、うちすてていせ給ひなば、いと心ぼそからんとて、
屋風をやすらをしあかてへなぬ、いと(大ん)むくつけう
てなからぐらいりこまへるに、ひきとぐめられて、
いとじうもこうころうかれば、備(へぶそ)ちかさ(大汨)とはりく事
をやいふらん、めづらかなるけぎかれとあばめなへる
さ夜のいよくおかしかれば、備(荒汨)ぬ心をさらにおぼし

ければ学しきしきんとぞかし。然ればかゝるりとも
いかるりかるよおぼしかるよかはあらん。佛(かけ)のれまし人
まてちかごとくもとて侍らんうとてなをぢさも
結て此心やぶらじとむそめて侍れば人はいかくしも
をしたりしふまじかあれどかるまうべるしれも
のとてゐし侍ぞやとて心まくさ程なるほかげまれ
ぐしのうばれかりさる紙がきやつまれしこゑ人ぞ
人のれけらひしふやうまりほりおかしげなりうう(慧心)
うろぼそうあさましきれすこうまぎいてらん人は
さたり所あるまじげなる紙我なるで務くる人も
あらましかばさぞやこれましいまくちあしき

ひぎなるまゝとさしうこのころのやすらひさへ
あやうくおぼしめへどいふかひなくうし（大ノ）とおひて
なさき給ひ氣色のいとしく（甚ん）おしかれがくはあしで
そのづゝ心ゆるひし給ありも有なんとおひたる
ひりうきやうちうも心ぐるしくて、さ夜まくらしら
へ笑ひ給ひ（大詞）りう此心の得ど氏およらで、あやしき
までさくしなれまゝる氏ゆくおさき袖のいろちど
こあしもし給ころあさまゝこげうしのいふかひ
なさもおおしるくまさ夜ぐなぐさむかたなくと
うしこそなる心もなくやつれ給へるすゝぞめれ
ほうげをぐとつしこなくまびしとおまどひ給へう

いとかうしもおぼさるゝやうにそいとさゞし
きさに学しさをんかたるし禰の文をひきかけさせ給
ひしも、ことわりなれど、こゝらあしんじなれぬる
こゝろざしのしるしにはさばかりのいえ残くべく
い夜たじめたりことめきてやもおぼさるべきなり
なりなるれ口きまへ心になんとてかれもれる事
きくしあり明の月かげようたじめておりくの
しふ心の遊びがたく如何さ夜をいとおぼく学れ
給ふ大心ばかしうもはりけるれどこゝくましうらう
心ぞへなるべしつれなくまめごち給けるれど学ぶ給
ことおぼかりあれかたはらなるこゝしうさ未振を縛

のれかたまきしへだてくがりそめまそひかし給
へりしやうがうれいとうだしく白ひて、まさきこ
のいとこちやかりかほれるけらひも人(並ハ)よりはがま
ほとけをもしきてし給へるれ心にて、わづらひし
くすこぞめれ今さらにおりかし心いられしさ
やうにおはくしうしきめしにさがふべかれがく
なりしなりしん程にこれれこころにもさうとも
すこしこころ給ちんちぎをめてのぶるしなし給
秋の夜のけらひはかくしぬ所だにをのげかし衣
おほかる後まして夜(ふね)の嵐(あし)もまがきのむしも心
ぼそげにのこきけるさうづねちまさにれれ物語に

時(ナリ)ぐさしいしへさまへるさ海いとこ(蓋ム)ところおほく
めやすし。いぎたなりつゝ人ぐいかうなりかうと
そしきさりて。こゝかりめ。こゝや(ハリ)の(大ム)給しき海などゝ
おぼし生るまげまなげし人ハ心のほかまかくあるゝ
まじきことゝもこゝろべきけざまこそくと。ものくこ
かるしうて。水のせとまなげれ(個ノ)そふらちしき給。ぐしか
なく明がたまなりまかり出ともの人ぐおきて。こは
づらり。馬どものいぞゆかとも。さび(蓋ム)のやぎりのあるゝ
やうなど人のかたるおぼしやられておりしうも
おぼさる。ひかりこしつゝ才のさうじをなしあけ
なて。宅のあられなりをもろともまこ給。女(大)もすうし

ねざり出ぬへるは。ほどもなき 杵(のき)のちりさるれば
悪ぶのつ面もやうく光(ひか)りこしまて 叶(ゆく)がこゝり
いとえんなるさ夜ひとちだせ。なほ(慧行)はなくてさぐ
りやうは月とも栄とも。おなじ心はまてあそび
ちりなき世の有様とさそしあはきてなん。すぐさ夜
ほしきといとなつしきさ夜してかたしひきて
なへば。やうく(大山)おそろしきもなぐさまてかう(行)いと
りしさるからで。抽へざてくなど写しば夜ことり
心のへざていさしまありまじくなんといふへ給。
あくなりゆきむし鳥(とり)の立(たち)さ夜よふ羽風(とも)ちりう
きてゆふ夜ふかきあしたれ燈(ゆき)の音こすりよひぐく

いまぐまいとゝぐるしき紙と、いとまりちうえ
げりしげるおぼしたり。ことありがほに朝露も
え分詰まじ。又人いかぶせしたり罪ゆべき例の
やうにちぐらうにもてなさせなて、こゝ世にこゝが
ひたることにて、いまより後もこゝやうにしれさ
をなてよ。ちまうしろめたき心にあらじとおぼを。
かぞかりかかがちなる心の程も、衣とおぼしたるぬ
よそかひなれとて、出給りんの音色もなし。おさ
ましうるにはなんとて、いまより後にされだこそ
もてなし給たんまてにあらん。けさにまた罪ゆるに
したるがひなへりしとて、いとすべなしとおぼし

これがあかくるしや。曉の別やまぐさしぬことま
て。げまどひぬべきをとなげきぐちなり。まは鳥
もいづくにかあらん。ほのくるをとなふる。京お
もひ出しる

芸 山里のあくれさしらく声ごとりあけめ
くるあさぼらけれ。女君

大 鳥の音も罕しぬ山とおもひしをよりう
ことはしづねこるなり

蓋
さうじぐちまてをくりなりなて、よべいり
し戸ぐちより出て、ふしなへれどまどろまれ
ぜ、ゐぐり悲しうて、いとゞくおもはましかば、月
ごろも今まで心のどろなるましやなど、かへん
ことも抱うく覚て給、姫(大ん)君ハ人のおもふらんことの
つましさまと、ゐんまをうちふされ、こゝ海もて、
これもしき人なくて世をなす身の心うきを、おる
人どもく、よりしぬことなるやうやと、つきぐり
しさがひけ、いひいづめるまころよりほかれこと
ありぬべきよなめりと、おぼしめぐらすまは、(蓋)此人の
れけるひ有様のうくましくハあるまじく、(八)右家も

さやうなるころだ人あらだと。おりくの給おぼせ
めりしかど。こげからはなほかくてすぐしてんとれ
よりはさ夜かたちもさりまおたらしげなるなか
の君と。人なみくまこなるしたらんこそこうれし
かしめ。人のよまなしてはころのいたらんかぎり。心
うしろえてん。こげからのうへのもてなしは。又
これかはこあげかたん。これ人(芸)のれさ夜のおれめな
うちまぎれたる程なるしばかくこなれぬる年ぶ乃
ちるしまうちゆるふ心もありぬべき夜。たげかし
げまこしまくこさ気色も。呼こいうじうつましきま。
ひがよはかくてゐしまそくむとしつぶけて。称なき

がちまてあしゐへるまゝ名おいとなやましかれば
なれ君のつしさまへるおくの事にそひ申給例
なしず人のさくめきし氣父もおやしとこれ中君ハ
おぼしつゝねゐへるまゝくておはしされバうれし
くてれぞひきくせなり給ま所をきれうれ望
香のまさるべくもあしずくゆりかゝる心ちとれば
夜ねべがもてあけかひけんしあそきられて夜こと
なるべしといとおしうてねゐるやうまて、地もの給
とず、荳まらうとハ弁のおもとよびいでゐて、二夜か
まかたひときれせうそこずくしきう罪とき
て、出ゐひぬ、総角(あげまき)とたゝれまとりなしくも心もて

ひろだりの備も對面しけるとや此君もおぼせ
らんといらじうとづしられば心ちあしとてなやこ
ろし給ひ人ぞ日（八ノ一回ノ事）のうりなくなり給ぬ。そう
ぞうしうとうなきことなどぞ。又つうまつる人も
なきまおりあしきれなやこうなきまゝ也。中の
君ひとなどしもてなて心がなどは。えとそ心より
給しねと。をめて罪人なへば。くしう奴ぬるまぶれは。
天おきなてぶろともまむすびなどし給。中納言（慧）
よりれつこあれど。けきよりいとなやましうなん
とて。人づてまぞ罪人給。さもこぐらしう。けうく
しうおもすと。人ごつぶやきアカ也。れづくなど

こそぬぎ挽(すき)たまへるに付てもかゝる時もをくれ
なんぬとおもひざりしをたゞちなく色にけり月日の
程をおぼすにいこじうさひのかなる男のうさく
なきさしげこのへるれさ夜どもいと心ぐるしげなり
月ごろくろうなりしのへるれすぐこうすまび
まていとる夜めしうてなるれきこはげにいと
さりまてうけくしげなる夜ひまさりのへりれ
ぐしなどもて夜しつくろたきて大ノ三なり給ふよ大ハ
れ出三るくこちしてめでこなれバひとしれぞ
おもふさ夜にかるひて人にこし給ふんにさりとも
けりとさりしでハ出たずやあらんとこれ申こう

うれしうて、いま海ハまぐこゝゆげる人もなく、なぬ
心よりしづさゝてゝ、罪人給ふ。其人ハ河(大ノ)こゝきて
給しかぢの衣もおくゝあぬへつゝん。なるが月も
志げ心なくておりしより、例のやうにきてんと、
又れせうそこあるに、心(大ん)あやまりして、けづらりう
おぼゆれぐとくうきてとさひて、對面し給ひぞ。
志(芸詞)ひのほかにころうきれこころかれ、人もいかるを
侍らんとれ文にて罪人なへり。今(大付)はとてぬぎ(ぶくを)すて
侍し程の心まどひに、中こゝしづこ侍てなん。罪人ぬ
とあり。痕(芸)をひて例の人(年)めしてよろづにのぬふ(内ノ人ハ)よ
にしてぬ心ばそされなぐさあるにハ、其(芸)をのこれこ

ぞしたる人ぞなれば世ひまなるひのひてよれつ乃
すこうまうけろひなどし給りんをいとめでたるな
べきことるいひあはせてよぐいれなしんとこれ
りたしひあはせそり娘(大ん)君そのそしさをばかうう
こしつゝ給ふ○どうさりけさて人めしなけけ
給めるまうちとけてうしろめたき心もやあしん。
せうし物語なも心もてやはとありうることもは
めるうちとくまじきは人の心ことをあめれと思
ひよりのひてをめてうしこゝろくはこれ(中)さうぞ
なしいぞんをとりざ夜なしんまてぐるさても
こそめてはおさまるまはまてなすまじきろろ

なめるとまして御のうまもこ初(そめ)ていなぐさこなん
ことまいでゝはいそぐは、ふとさうこと浅まちと
家人のあらんぼいまなんあらぬとうけひく
気色のとまりなるはうゝ人は人のしたんことをあい
なう、おきさうこまやなぐつゝ給なるんと、おぼし
うまふるとそしきぐるましらせ給ひずはつゝまやえ
んと身をつゝていとおしそれがよろ(中と)げようら
うこらひて背(ひし)の肌(ハ)をもむけも世中とうくこころ
ぼそうて通しまつとも中こ人まらへまうるぐ
しき心つふなくぞ此給をさしをおもしをし
よれ此ほどしまてどこなひの此心をこぐりし

いこゝろはいこじかりけんとがましとてさだめなり
の給しひとぞよそじんへじとせられじ心
ぼそくおぼしもさる心ちめきじんへのおやまう
心ごゝろ袖にはくむめかしそいふとりちゝれげは
さのこやうの事れどすぐし給ひんもおけらく
有目はそへてさ中ノとゝどのこそおくしう
ろうかしうちし袖はむ字ゆうとも中御ゞゝる
よみつるはまてゝしみそかうあの首様もちも
ざゝちくおすゞさむじゞりさ給ふさげやとこそ
かへがいち中んるおぼすろうく心うくてひと所との
やはさてよるさてかへとはさて給けんなうが

しくもあらぬ身れうしろめたさはうぎそひたう
やうにそあぼされたありしが心ぼそさはなぐさめ
まはかう朝夕にこなりたりいかるるかたにかたり
向うしあしくしぬれば大ん げまといとあしうて伺
とられかれうたてひがくしたき物にいひたしかべの説
なに付てしこそぐれ給ぞやといひさし給つくれ
ひに蓋まらうといかへり給ひ大姫君いとむつかしと
あぼせて弁(づん)に来てはせうそこども罵人つたへて蓋ノうし
こ給をことたりなるかしとつぶくとさしあれば
大ん いへもし給たずうちなげきていかにもてなす
べきなまかはひと取おもせましかばどもかくも

さらべき人まあのかれなりてすくをといふなる
うたまつけて別を心ともをぬよるれバこれれいのこ
とまてこそハ人ひしへなるとがをもうくするれ
あるかぎりの人ハ年つもりさらしげまなれが
おしハおつてころをやまてまつかしげなる
こと後罪しおしまれどこはそうぐおきことかは
人めしかしぬ心どもまてさぐ一うたまいふ
こそそとこゝぬへバひきうごかしのぞりこそそ
あへるもいとこころうくうとましうてどうぞれ
給ひずおちじころまなまぐともうたひ罪し給
ひけれ志もうるすぢまはいますらしおもし須

おほとうまてなまとも云入給ふ事ハおやしうも
なりけり分かるとこゝにおくゞ夜よむ。きておかす。則
のゝこのれぞどもなりうへよるゞそゞのし里人
川。これさうこゝろすべかめる気色をおきましく。
けに何のさたり所かはあらん。ほどもなくてかく事
れすまゐのかひなきさ。山なしの栄ぞ。のがれん
かさなりけるまゐらうとはかくけぞうよこれかれ
まもくちいれさせず。志のびやうよ。川ありそめ
けんことくもちく。もてなしてこそと思そめ給
けることなれば大ノ御こゝろゆるし給ふすゝ。川もく
くてすぐさんとおぼしのまふを。うれはい年人の

をのがぢくさらひて、けぞうまさくめさるどす
さ(地)はいへど、あくらぬけまや、老(おひ)ひがめるまや、いと
おしくぞこゆる、ひ(大心)め君おぼしつづらひて、弁が
来れるまのあふぎ(大詞)しも人まくぬれころよせと
のこの給ひたりしをきくをきいまとなりては
よろげまのうちなくこれこそしてあやしさま
でうちとけまたる程、ぬひしまたがふさ夜ケ家は
心ぢへのまじまて、恨給めるこそつりなかれよま
人めさてあらまほしきまなるばかりれことをも
ちまかはもてもなれてもしいましされど若より
しくなれそめたる心まていとくるしきをこれ(中)君の

さうり色給たんも口おしけるうすまゐ色ぐ
ひれゆうりは前をくのきおぼゆる紙まことは無しう
しとおもひきてし給こうろぎしなしがおなじことは
ぶなしぬへうし三紙分こうろのうちも三れ
ゆつりてこなたん心ちなんすべきある紙かやうり
よろしげは罪人なされよとそぢらひさう抱かう
あるべきさき海をの給ひしくれば中ゆく衰とみんなる
さ(刻)れこそそはさ紙ぐもれ氣色をこぬふれば中と
よくこさてしさすれどさはえ(苦ノ)ぶひあらしむまじき
白
其ゆ宮のれ恨(うらみ)ゆるさまさうめれどまこそなる
さ海まいとよくうしろこさてしんとなん。きてし

ぬふ。それもしふやうなるれことどもなり。ふる所
ながらおりしまして、ことさらにいうじきれうろ
何らしてうしづき罪人させ給ふんにはそしもうく
世ゝ有がたきれことどもさしつどひ給はざらまし。
うしこそれどうくいとしろぎなげなるれ有さ両を
こなるにいかよなりもてさせ給ひんとうしろめたう
なるしうのこゝなるを。後のれうろもしりがたけ
れどうけらしくめでたきれすくせどもにこそ
おりしましそれとなんかけぐおもひきてゆる。
お家のれ遺言(ゆいごん)さがへじとおぼしめしてうたは
といひなれどそれはさるべきひとれおはをぞ。

されほどなしぬことやおりしまさんと常して
い夜しめ寝しさせ給めりしにこそ此葉のさやう
なる心ぞ人抽し給ましかばひとしろをうしろ
やすくこをきなりていかにうれしかりましとおり
おりの給ひきし抽を得ぐくにつけて心ふ人に
とられ給ぬる人はこうきもくぐれるも心の得なる
おりましきき夜にさすらふこぐひぐにこそおほく
給めれこれこれ例のことなめれば中どきいふ人も
給しずましてかくだりことさらにもづくり出ま
ほしげなる人の此有様に心ざしふかうありがる
げにきこえし給をおなぐちにもてなれさきぬて

おぼし垂つるやうに、をこるひのほいをとけぬ。
さりとて雲霞をやはるぐ。すべてことおほく口つぐ
られば、いとくうつく心づきなしとおぼして、ひれふ
しぬへり。中の君もあいなくいとおしきれ氣色
うるとこなり給て、もろ共に例のやうにおほとの
ごもりぬ。うしろめたういかにもてなさんと覚ぬへぐ。
とくさらめさてさしこもりうくろへぬへきものく
ら雨ごとになきれすまゐなれば、なよくかにおかしき
れぞ上にひきうせなりぬて、まぎけるひあつき程
なれば、すゞしまろびのきてふしぬへり。并ハのおひ
つゞき雨を、まらうとに子也。いかなれば、いとくうう

しもよ紙にしたるれ給らんひだりぶちのやうし
あらりまて、つゆなるさ柚にしたりのへるまやと
おぼすまいとぐ我心にかくひておぼゆれば、さうし
ぶちまつく見しず、さらばもれごしなどまも、とこへ
あらましこさとにおぼしなるまゝにあるれ、と取
ぶりおぼとのごもらんあらりに志のびてうぐ
れくのゆへば心(川今)志て人とくしげめなど心志れな
どちはしひかまふ霄(よお)すくしすぐろほどに風の音何
らくかようちかくに、たゝるまさき夜なりしとこ
などはひしくとまざりくをとに、人(恵)の思ひゆへな
かりまひはえこさくつけ給ひしとしてやをらうち

びきいり。おなじ取はおほとれごもれりをうしろ
めたしとしへど。つねのとなれば。ほかへまとも
いりごさろえん。れけたひをもたじくしりしず。
こなりぬへつらんとしけるに。大ちもまどろこ
こ度ちのばかと罪なて。やをしおきしぬぬ。いとと
くたひかれ給ぬるに。何ごろもなく孫いりぬへるを。
大ん
いとくおしく。いかにすりわざぞとむひつぶれなく。
もろともにかれなるぞやとおもへど。さらもえ立
かへられで。わなくくしくこうまへば。火のほのな
一
なに。基ちこさすぐるまで。いとなれば。本帳乃
るびらをひきあげていりぬるを。大ん
いろじうなと

おしくいかに覚(ゆう)し給ふらんと思ひながら、あやしきさ
りべのつらに、扉風を立てうしろのむつかしげ
なるに、ねぬひめ、おらましごとにてゐるつらしと
思へまゐるを、まいていかにめづらかにおぼしうと
まんといと心ぐるしきにも、すべてたらぐしき
うしろみなくて、落(おち)とまる男どもれなるしき紙、
ひつぐけぬふに、いまはとて山にのぼり給しゆ(ゆふべ)の
れさ夜ちごとに、今の心ちして、いとじく乱しくなる
しくおぼし給、中納言(薫心)ひとりふしぬへりとこうろ
しけるにやとうれしくて、心とさめさし給ふ、
やうくおしらざりやうとこう、今すこしうつくしく

らうたげなる気色は、海さりてやと覚ゆ。あさまし
げにあきれまどひぬへる様、げにこころも志らざり
なりとこゝゆれば、いとくおしくもあり。又なし久
して、大ゝ、かれぬへらんつらさ、まめやかに心うく
ゆゑなれば、これをもよそのあとはえ志ひたるれまに
それど、我はいのこゝろんくちおしくてうちつけ
にあさかりなりともおぼしなしに、此一ゆしはる様
すぐ志て、つゐにすくをれかれずは、こゝろざ海に
なるんも、何かは、と人のやうにやはとおもひさ海
して、例のおしくなつしとさ海にかくらひて
あし語つ、お比いへどもは志そしに、川とおもひて

中の君はいひてまかおはしますらん。あやしき
けぎかれと。さどりあへり。さりともありやうあらん
などいふ。大かた例のことなりに。志はのぶかうちして。
かぞうくあれはこまほしきれかたち。有様を。
ならそいとゆてもなれてはいまゝならん。何かこれを
世の人のいふめり。おそろしき事ぞつきそてまつり
ことんと。をはうちすきて。おいぎやうなげにいひ
なす女あり。まゝあかまがくし。かその地が。川かせ
に夜をん。さて人にとをくてあひ出させ給めれば。
かうことにもつきぐしげに。もてなしきこゝて給
人もなくおはしますよりしなくおぼさるゝ

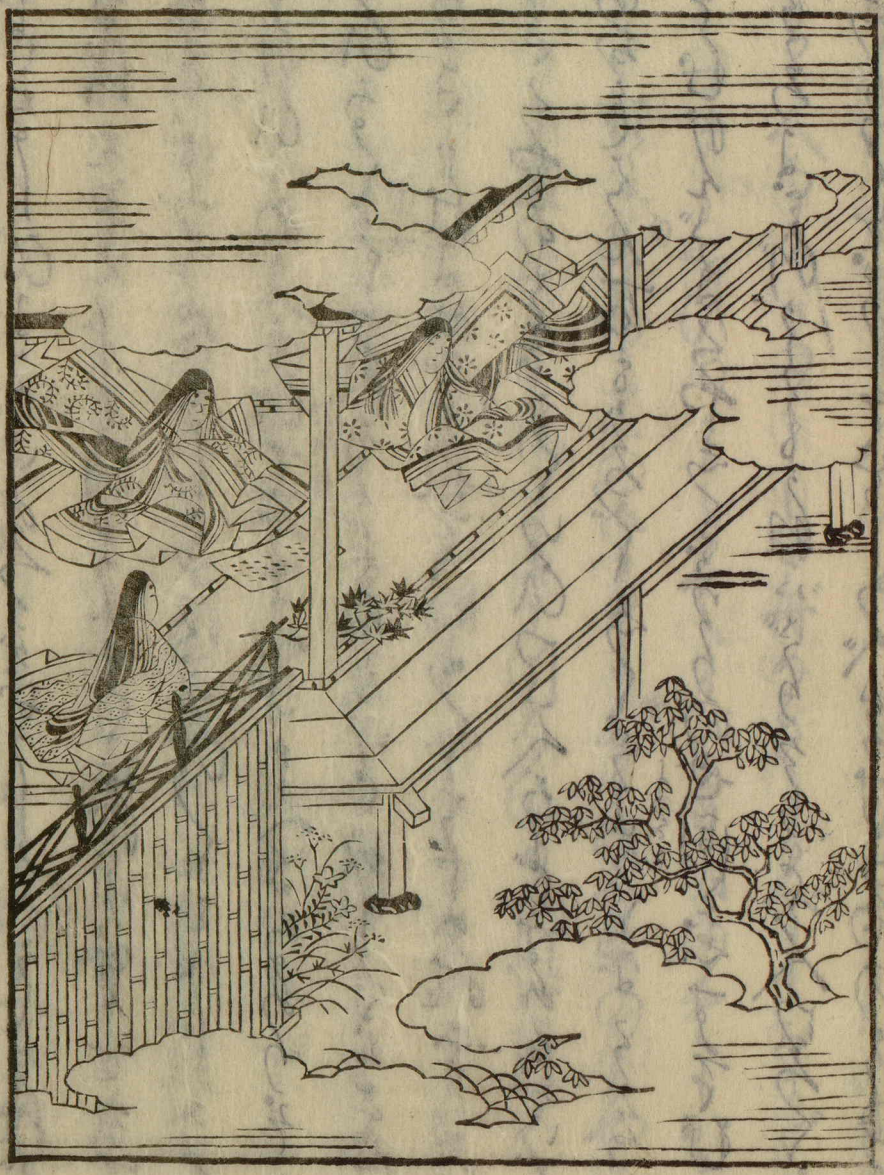
こそ。今をのげうこゝまりなれ給なれば心深し給てん
などかうらひて。とくうちとけてなまふやうにて
おりしまきなんといふくねいりて。いびきなど。
うさいらいてくすうもあり。おふひ（苦心）とがうましもあら
ぬ秋の夜なれど。程もなく明ぬる心ちして。いつれ
とけくべくもあらずなる夜めしきれけるひを。人やり
ならずあるぬ心ちして。おひ（河）なぼきよ。いとこゝろうく
けらき人のれさ夜。こなしひ給なよなど。のちきに
焚て出給。我ながらおやさく夏のやうになぼゆれど。
なほつれなき人（大）のれそしきい夜一こびこをてんの
こゝろに心のどめけく。間の出てふしこまへり。年

まりて、いとあやしく、中の君ハいづくにかおはし
ますらんといふ後、いと(中ん)たづしく、しかけぬれそ
ちに、いかなりけんことにかとしひふしこ御へり
昨日(きのふ)の(大ノ)給しことをなげしいでゝ、姫(大)君をつらしと
しきこゝろ給、明(地)にけるひかりにつきてぞ、かべ(大)の子
かれこうぐすさひ出なへる、なげ(大ん)すらんこと乃
いとくなし、かれがくこゝに物もいたれ、こ後たず、
ゆかしげなく心うくもあるかれ、いまこゝろ後もこゝろ
ゆるびすべくもあらぬ世にこそと、しこゞれなへり、
年ハあるさに来りて、ゆきましかりけるれこゝろ
づよさ後、こゝあらりして、いとあまりふく、人にく

うりけることといとあしくしほれぬうり。[業行]きしる
のつゝきたる後ありあうこちしてよろづはに
しるぐさめつる後。今夜なんまことにくづしく。
男もなげけべき心ちすゝすてぐうくおさし[中を]とさ
なりこまへりけんころぐるしさ後。[大ノ子]しも男ゆかるゝ
こゝ又ひとつるに男をもえおもひをつまじかれ
かけゝしきすぢにいづかるにもしきてしじう
きもけらきもかるゝぐに[手]忘られ給まじくなん。
[白]家をまどのもづしげなく男を給める後おなじくに
心さくとしふかるぞことにもれし給らんとこ
ころえもてつればいとゞことなりにもづしくて

のまりて人ごまえしなんともねさくなんらし
くおこがましき身のうへぞ人まぐるもしし
給たまどゐんじをさそれいよまもいそぎ出ぬぬ
ふがれふ先をいとおしくとさくめきあへり姫（大ム）君も
いかりしつることぞもしをろかなりろろも抱し
給たぐとむすつづれて心ぐるしかれバすべてうち
あれぬ人ごのさうしら後よくしとおぼせて。さ後
ざ後せふ給ま（芸ノ）此文あり。例（大ム中ヘノ清約ノ文ヲ志ノ給ヘ）よりいうれしとおぼし
給もかけいあやし。紙のかしきもしらずがほ。
何をさ枝（えだ）のふえいとこく紅葉しうる後
（芸）おなじえをけさそそめけり山びめまいづれ

ふりき色とくたぐやさばかりうしこつかしき
もちくことずくちまことそぞてぞしつこぬふ
とそ(大ム)てたりとちくもてあしてやこちんとちあり
とこ給も心さはぎて。こくりしかましうれかんりと
いへばさ(大ム)しぬへとゆづらん(中へ)もうさておぼえて。
さすがよりきまくおもひこぐれぬふ
やまび(大)ぬのそむろろハワ○どもうけ
ろふりてやふりきちりしん



大ノ
とゝなしひまうさゝのつゝがおうしく（芸ん）こしそれだ
ゝ紙えゑんじたけまじくおぼゆ。身をかて
ゝるど。ゆづり給ひしこさは。ふびくこししゝど。
うけひゝぬまゝびて。うまへこまへるゝあり。その
うひゝるく。うくつれゝるゝんもいとおしくゝるさけ
ゝるさゝもれまゝをうれて。いよくたゞめれゝるひ
がこゝやあらん。とくいひつゝへゝるどすあるおいゞ人
のおもたん所もうろぐしく。どまうくまころを
そむけんごまくやしく。がゞりの世間（よのをり）をしすてむの
こゝろまゝこゝがうもうれハざりやりと。人ゆゝく思
しらくをまして。をしるべゝろすさ物のまゝ。ま

おなじあたりなりしかはしくそぐ先ぐらん。いと
人ほしへなるべしと毋めきたるべしなれど。
よもすがらしひありしなて。まぐ有明の雲もおな
しき程に白アマ家のれるに荒り給。三条のこや
やけまし後は六条院にぞうけろひぬれば。ちく
てはつれに糸給と。白人家もおぼしやうなるれろら
し給ひ。荒ん まぐらくことなく。あらまほしきれ
すまねに。おまへの前栽(せんざい)なれに似ぜ。おなじき
草の姿(すぐさ)も。木草のなびきざ後も。ことにこなされて
やまと水にすめる月の新さへ。ぶつにかきたるやうなる
に。ぶつにもしるく。白おきおりしまし。ひ荒ノ風につきて

吹くり白ひのいとしるくうちかほりに。ふと（白ん）それと
おどろかれて出るをしなりぞぶれぬさ夜にひき
つくろひて出給。いしとのぼりもたてずつい居ぬ
れば。ゐ（白ノ）ぬうへにちるどもの給ひて。うらんによりぬ
ゐて。世中の出物語アルかたし給。かれ（宇治ノ事）ひろも出
ことども。あれ（白ん）てついでにはおぼしいでく。よろづに
うしに給もつりなしや。こげ（茎ん）からの心にぶにかるひ
がうきとしちふく。さもおたせなんとなりひなう
やうのあれば。例よりはまめやかにあるべきさ夜
ちどに給。あけ（地）ぐれのほどおやまくにきりはたり
て。そのけかひひやくかるに。月はきりにへぞて

られてはのちもくらくまめきこそ、山王の
衆ある宿坊也出給ふ、家みれバの役まかすずとくも
し給ふまじくうしひ給をぢ候ハヾいかれぞ
女房衆さけり御目かき候ふまざいく心をば
うやまふ候いはんど、ここうれあり
きりかなきあしこれ系の女房衆心をよそて
こうん人ぞこうおんべてやいおんとも、つくしまめれバ
おかりしくもしと、おもてくいもしう立なめ。年ぢ
くのあ人ぞ、人のは宿坊といゝあんとうまろめる
くもしまぐくちなどもこおぞし給まじくぞしくる
らく心ざくをの、ちうとどうまろやこゆやるぞぞ、おや

うくせいたりしをちまごともにおしくはもれ
し給まじかりとせんだ。かれいとおしくうち
まちませたばかり給有様も。こゞふやうちゝんも
ちさけちゝさやうちゝをさりとてさえ。え思わしこ
むまじくおぼゆれバまづゆづり置て。いづくの根
ともおかじなどしたませかまふなこころともおり
給ものでこころをばくせりなし給もおかしかれど。
芸詞 例のかろしかるかれ心ざ海に。抱おもたをんこそ心
ぐるしかるべかれなど。おやかたになりてきこえ
給ばかしこのへがぐりこころにと聞かことちゝんま
ごとかりつかなど。うとまめやかなの宮道だ。かけ 芸詞

こころどもにはさもやとうちなびきぬべきけしき
いこしずるん侍るつうまつりにくきこゝやげゝへり
とそ侍れやとておりしますべきやうなどこゝ海ゝに
罪しきらせ給ふ廿八日ひがむのちてまてよき日なり
それが人きれぞ心づかひしていこじく志のびて
ゐてまゐるこささいの家なぞこそしめしいでくハ
なれありきいこじくせいし罪しぬ人だいゆく
けげうちしき紙をちにおぼしうることなれば
さりげなくとまてあつふもけりなくなん舟渡里
なども取せそれがことくきこれやどりなどもかり
給ちず。それけるりいとちかきこさうの人の家なり。

いと遊びて、白宮をばおろしてまつりぬており
ぬ。地ことがめてまつるべき人もなされど、夜ねぐそ
ひづるに出て何りくにも、気色ばかりをじとなるべし
例の中納言(薫)夜おりしますとて、けいめいしあへり。
君ぞちる夜ひづるりしくさくぬへど、うのろふ方
ことにはほりし遊てしかぞと、大ひめ君おぼせ、中君は
さふかることなるありしかば、さりともと思なすがら。
心うかりし後は、ありしやうにあ○君をもおもひ
ことなし給ちず、心をられてもれしぬふなるやかやと
れせうそこのミ罪をかなひて、いかなるべきことなり
うと人ぞもらるしがる。白やをぞれ馬まて、くらき

まぎれまおりしまさせこまふて弁(蓋詞)めし出て宮行(こゝもと)
まこゞ一ことこそしさすべきことなん侍るをおぼし
もるゝ川さ海こなりてしまいともづしかれぜ
ひこやごもりまてえやむまじき代いまさばし
かりして代ありしさ海まはこちびきぬひてんや
などうしもなくかこらひこまへぞいづ(弁ん)かこまも
おるじことまそいとおもひて来りぬさなすんと
きこゆれば(大ん)されぞよさひうけりまかりとうれし
くて心おちゐてかれいり給べきこちまはあらぬ
ひさしのさうじをいとよくさして對面志ぬへり
一(蓋詞)ことこそしさすべきがまこひとさくぞうりの

しらんハあやなき後いさくかあけさせたまへいと
いぶきしと申しさせぬへど大詞うくてもいとよく申しぬ
べしとてあけ給ひず今大ん はとうつろひなんをこぐ
ならじとていふべきまやなまかは例ならぬ對面
まもあらず人まくいしへてよもふかさじなど
しひて。かぐらりも出ぬへるまさうじのなかより
此袖をさしへて。ひきまきていうじうしむれど。
大ん いとうるそも有ひざかれなまくさくいれつゝんと
くやしうむつしかれどこしらへて出してんと
おぼして。大詞とく人とせひけき給まじきき後まかすめ
けゝかるしひぬへるこころぢんなどいと衰なり。白 ハ

としへ罪をつるまくに一束のさぐちかりよりて
扇をなるしたまへば弁も来りてこちびきこそも
ささぐもなれにけるなのしるべおうしとおぼし
つくりしぬるをも娘（大ん）ぎみはしり給はでこしらへ
いれてんとおぼしたり（薫ん）おうしうもいとおしくも
えてうちくにころもしたざりけるうしろ後
かれんもつきさり所なきこちすべかれば（詞白）こやの
しるひなひつれば えきこしいなびでこくにおもし
つる者もきでこそまぎれ給ぬれこれさうしぶろ
めるへやうたうたれなりぬるん中宮に人ひ人
にも女詩りぬべきかるとのなふに今（大ん）すうしにしらぬ

ことのめもあやに心づきなうなりて、かく(行)よろづ
にめづらかなりけれこころの程をしらぐ、いふかひ
なきこころおされさも、こしなりにけるをこそりに、
おぼしあなづるにこそをとく、いたんすなくおもふ
ゐへり、今(業行)ハいふかひなし、こくたりハ無て四月しさせ
てもあまりあらバ、つゝをひ申せ、こまへやんごと
なきかたにおぼしよろめるを、すくせなどいふめる地、
更(さら)にこころにかなはぬものに行めれば、かれ此こころ
ざしにことに行ける後、いとおしく心にまゐるり、
かなはぬものこそ、遂(とき)前なく心うく行かれ、程いかぐハ
さんにおぼしよりね、これをさうじのかため

ぎやうにつきも成ことは抛ぎよくをしたり
学ゆる人も将じぎちるべといぎちなひかへる人の
心ころみよも成さまうくもねかさがりてあつすん
とはあばしたんやとてぞうじをもひきやぶり
ひべきし気色なれば大仏いさんくちなくこころづきたるれど
うしらへんとむちげあて此洞のあふすくもといふ
らんすいめよ色こそぬことまていろはおしくさらひ
さゞられぞ哉しぬ洞のくさりかさがらゆちて
あんごはいふまでもなし落ぞと麦のやうはあき
ましとなるのちれ世のくめしまいひ出る人もあれば
昔物語なぞまぞくさつよおてめきそつらり出るる

まれく夜とひまこそハ夜ぬべかれ。かくおぼしか
まゝるころのほどをも。いかるりけるとかはをし
たり給へん。猶いとかくおどろく志う。こころうく
かとりあ川めまどたし給そ。心より外にあるがしへバ
すこし志のどまりてきこしん。心ちもさしくよかき
ろしすやうにて。いとなやましき候。こゝようちや
すまん。ゆるしぬへというじく。縄(まび)こまへだ。さすがに
ことりをバいとよくの給がこころもづかしくらう
こく見えて。お(詞)が君ハこころに志るがふことのこぐひ
なけきバこそ。かくまでかたくなしくなり侍れ。いひ
志しず。よくうとましき物におぼしなすめれバ

きてんかるなし。いとゞ世に(あと)とゞむべくなん
おぼしぬとて。さらばべぞてなぐらもさうしさせむ。
ひとゝかるなうちすてさせ給そとて。ゆるしなり
なれば(大ノ)ちひいりてさすがにいりもたて給ちぬ後。
いと(遠心)哀となもひて。(詞)がぐらりのれけちひをなぐさめ
まておしゆらん。ゆめくと思ひて。うちもまどろ
まず。いとゞしき水の音にめもさめて。東宮の
あらしに。山鳥のこゝちしてあらしの絶れい乃
明のけちひに。(うね)瑞の声(こゑ)ちとゞ聞ゆ。いぶかなくて
出すべき気色もなきさまと。(大)心やましくこハ所なり
給もげにあやしきけぎなり

蓋しるべきし我やかへりてまどふべきこころ
もゆるぬあけぐれのほ汨かるゝあし世まありけん
やとのまへに汰心からまうくぞきくぬふ
大かるゝぐまくしす心をせひやれ人やまるぬ
ほまぐまぐとはのるの絵を蓋いとあるぬこころ
されば汨いまこまるうへぐしまて侍めれど・いと
わりなうこそなど・よろづまうしまけ・はのぐと
明り程まよべのるゝより出給也・いとやさしかり
かるまひなしまへるまはひなど・えんなるれこころ
げさうまは・いひしらずしめりまへり・わびべどもも・
いとあやしく心えがたくおもひまどされかれど・

さりともあしざ海なるれころあしんやいとな
ぐさめたり。白ん ぐらき程まといそぎ帰りぬふ。君の
程も帰るさはいとちろけくおぼされて。心やすくも
えりけりはざらんことのうゐていとうしき海。
剣をやへざてんとおもひなやミ給なるまぎ人
さはがしからぬ船のほどまおいしつさぬ。らうつり
れ車よきてあり給。ことやうちろ女車のさ海し
てかくろへいり給ま。蓋と白と之 これまらひぬて。白詞 をろかなる
ぬ家仕(ミヤづス)のれころざしとなんせぬふなとし給。
蓋ん 志るべのおこがましき海。いとゆきくてうれへも
まし給ちず。白 家はいいしりとれ文なりぬふ。山里まハ

誰もくうての内ちさら御をすゞしめられさまへり。
様〻はおぼしりまへけり御文まも出し給はざり
けりこまくうとまへりつしく。おもだんをばちさらて
おそめもこあはをなり給をすゞしりし御をも。
さはくとはえあさらめ御をそでこそうり
らうぐうしくちらうて給へどもいまゆしこう
まうぜ。気色こをなれど。おぼしほれさうやうて。
されまし人べのおそうすれば。おやちさいけざりうるとや
あへり。されなともひこころさてこせなりさまへど。
さうしはおこさあゞり給をればひさしく御めさ。
されいはひらびたり

はいかひ見ひかり

白 よれつゝ日はしひやすしん霧かきたのさく
原分てきつるも。大んかきなれうまへるすこつきなどの。
ことさしまえんなるも。大かたまいけてこ給しは。
おりしう見てしをうしろめたう抱おもひしくて。
我さしべまてきこてむまいとけくましかれば。
まめやかまあるべきやうをいこじくをめてりくせ
こてまつり給。しをん色の目そなが一かさ日まこへ
がさ日のちう夜ぐしてのふれいかひくりしげま
しこれがけくまをて。ともなる人まなんをくせ給。
ことくしきれいかひまもあしず。れいなれこまふ
うへけしはなり。ことさしまへまかしきもしさじと

ぬばしかれども、よべのさしがりしおいべのしわざ
なりけりと、抱志くなんきこしめしけるそれ取も
れ志るべきそひさまへど、冷泉院（生ぜい 薫付）ありなるず
さましぬべきことなれどて、とまりぬぬ、例（白ん）のこ
ゆくよふれて、すき海（世をイ）じげよふ代もてなすと、よ
くおぼせ、いかゞ（大ん）をとんはいなしざるもし事（こと）
とて、とろかまやをとしよりなて、れ志つしひな
どうちあはぬすこれさ海なれど、さる方におかし
く志るして、まちきて給ひり、（白）そうかなる代中
こち代いそぎおりしましたりけるもうれしきわ
ざるるぞうつはあやしき、さう（中ん）じこれ代まもあしぬ

さるなりてつくろはれなり給ましまれぞれいたく
ぬるれば大さうしびともうちなきけり世(行)中ーは
ひさしくもとおぼし給しみが明常のながめにも
こぞれことをのみなん心ぐるしうせ罪ゆるまじ
人ぞもよりなべさき夜のことくさくまくさまで
いひしらすめれば年へたるうろどもにはさり
ともこれことそりをもしりたんとうぐしくも
あらぬ心ひとりをそてくうくてのみやハみなしん
としひなるやうもなりしとこぞいまうくしひも
あへずこづしきことぐもまこぞれおもふべくこ
さしましひかけ給しざりしまこれやげに人のいふ

めかのがれがたきれ奴なりけん。いとこそくるし
かれ。すこしおぼしなぐさまなんに。志らざりし
白ノ入給ふなり
さ風をもきてんすくしとかおぼしいりそ。何こ
もぞえんとれぐしをなでつくろひつきそのへど。
中ん
いらへも志給ふ。ど。さすがにくおぼしののふが
げにうしろめたくあしかれともおぼしをさてゞ
を。人いらへにこぐらしさとそひてこあ何かいれ
なんがいらじさ氏。ろづるせねのへり。さう心もか
白ん
くおされたまへりしけるひごに。なべてなるず
おかしかりしをまいてすこしよれつゝにはなるび
のへるハれこころざしもまさるに。こそやすくか

よひこまれざらん。山道（ミち）のちかけさも。むかいて
まで おぼして。心ふかげにかたらひこれめぬ人ど。
あ（中ん）れともいかにともしひつき給ず。いひ（地）しらず
りしづく抱のひめぎも。すこしよれつゝの人げちか
く。おやせうとなどいひつゝ。人のこゝずまねをも
こなれぬへるハ。まれてもづしさもおそろしさも。
なれめにやあらん。家にあがめきし母ひとこそ
なれ。かく山ふかきはあたりなれば。人にとをく。抱
ふくて。ならひぬへる心ちに。おもひかけぬ有様の。
つくましくもづしく。なるにともよれ人にてず。
おやしうねちかびこんりしと。ちかなきはいふ

まてもいひいでんかたなくつくしまゐり。さるハ此君（中）
しまぞらうくしくかどあるかたのまほひも海
さりぬへる。三日まあたる東ハもちゐるんあると
人ごのきこゆれバ（大心）ことさらまさるべきいもひ志
ことまとそもとおぼして。此（おまへ）前まてきさせ給も
こどくしう。かのハおとるまゐてをさて給も人の
こるらんことまぐかられて。おもてうちあるめて
おもすさ海いとおかしげるり。これかゝ心まや。のどうま
けたかさ抱かゝ人のこめ衣まるさけくしくぞ
おかしける。中納言（董）殿より。（訪）よべ来らんと思ゐへし
かど。宮（宇治ツるす）づ人のらうもしるしるげるめるせよ。ちふ

ゆへうしてあるんど。來はざりやくまやこむかしくん
れど。まれぬ宮のとうしあるげよ侍し。えぐりごゝち
いとぐやすくて。やすうられ侍ると。こゝちのくまりを
ま。おいつきとゝきをのそて。まうけの物どもこまやうる
めのあるどもせざりけり。宮こそとしまうさるゞ。つごそ
びわあまうらけごるはいれて。おい人の許(もと)よ人ぐの
れうまとそすり。宮(女三)のはれうるゝよまうつしひけるる
ちるがひてい。とお名くもえざりあつめ給もしざり
けうまやあんど。ざるうこぬおやあるど。ちうてまは
いれうしつ。れれうとお名しさ二ぐりび。と
ゑうしまうしうるほ。ひとへのれぞの袖ま。ぐぐいの

ことなれど

薫 さは衣をさてなれきとはいはずともうごと
ぢりはかけずしもあらじとおどし笑しぬへり。
大ん こなるさかるゆりしげるきれことをたづしう
いとゞこゝろてれかへりまもいかゞきてしんとおぼ
しつづふほど。れ使(ミつひ)うへはまげかへれりけり。
はやしきしも人をひかへてぞれ色ぬふ
大 へぞてなきこころぢりはかふともなれ
し袖とはかけじとぞしふ心(大ん)あれしてしくしこゞれ
ぬへるあはまいとゞなほしくしきほおぼしけり
まくとまちこ給ひ(薫)といふで衣まぞしなされ給。宮(白ん)は

その夜内に来りまして、えまうで給まじげなる後、
人しれぞれころもそしまして、荒しなげきたるに、
中宮(内右ノ)なる後(詞)かく独(ひとり)おりしまして世中にすいまへる
れるのやうくさゝ由なる後いとあしきことなり。
なるまごとも抱これましくこそたる心なつひ給そ。
うへ(今上)もうしろめたげにおぼしの給と、室ずこがち
におりしますに、いさめきこしまへだいと(白ん)くるしと
おぼしてれとのね所に出まして、れ文をきて生れ
まへる。名称もいたくうちなるがめておりしますに。
中納言(業)の君に来りまへり。そ(白ん)なるの心よせとおぼ
をば、例よりもうれしうて、いかゞすべきいとうく

くらくゐぬめありどころもなくわれてあんとおもげりし
げるおぼしきり。上ル よくれ気色をこなたんやおぼしそ。
詞 日ごろへてうくるまりのへる代このひさすのせ
給もぞいそぎまうで給あん。いとゞまろうしぬ
よしやおぼし召し。さも給らん。ざいもん前のる
まうけ夜もりつれば。人しれずりうりうしと文
づへのさうしは。おいなきとらんずうやちべくんと。
ゐほのいろぞひ給つるとやとまんへど。白詞 いとまうる
くるぞおぼしの給や。おほくの人のさりあすまと
あるべし。世るとゞめあなづりの心に。おすまじきる
かつもらんず。すべて一本さる男の程ぞこそやさあるは

なりかれとて。まことまいともしくさへ思しけり。
いと(蓋ム)おしうこなりなひて。おなじ(白)れさもがれまとそ
いおもすなれ。こゝひのけこまはかなりきてして。
身をもいさづらまなし侍りなんかし。ごとくの山は
馬はいかゞ侍べきいとゞもおくきてやさなり
所なりしんと思しなへがこゞくれまくれて。ふけま
けり東なれがおぼしまびて。(白)れ馬まて出なぬ。(蓋行)れ
ともまは申くつふまつらじ。れうさろこをとて。
此(蓋)君はうちまさふしひなふ。(明石ノ)申(白)安のれうまに(蓋)まり
なへれが(白)安は出給ぬなり。(明石中宮詞)おさましくいとおしき
れさ海かれいかまへこなりしん。(今上)こへきてしめしてい。

いさめきこえぬが。いふかひなきとおぼしの給こそ
こりなきれとの給ひす。おまた（荒ム）宮こちのおとなび
さくのひこまへど。大宮（明石中宮）はいよ〳〵けうくおかしさ
けさひなん皮さり給ける。女一宮もかくぞおもし
ますべかめる。いかなるんありよう。かぐらりまても。
もれちく。れこゑをぞ宮なんと衣ほおぼゆ。
すいさう人のおもふまじきこころつかふんも。か
うやうなる。れなりしひの。さすがにけど我うしば
いりこちて。心にかなはぬおりのことなるんかし。我（まが）
こころのやうに。ひがくしきこころのこぐひやは。
又世にあべかめる。それぞになる我うぞきこそめぬる

あたりはえとそしたへねとしねたまへりぎゝしゝ
限(うぎり)の女房のうち心ざ夜いづれとなくひろびたる
なくめやすくさりぐくにおかしき中にもあてに
すぐれてめにとまるあれどさしにくしぐれそめ
じのころにていときすぐにまてなしなり
とくさしにしたしがふ人もあり大きたづし
げにまてしげめなへるあたりなればうりべしそ心
ぐるりまてしづめたれうろぐなる世中なり
それば色めしげにすくしたるしたのころまり
てしゆるもある紙さ夜ぐにおかしくもあれにも
あるれと立てもなてもたづつ○なるさ有さ夜を

心ありき給。(宇治)りしこゝよは。中(芝)納言殿のことくしげ
まいひるしぬへりつる紙。東ゆくるまでおりし
まさで。(白ノ)れゆこのあるを。(大ん)されバよくむすつがれて
おもするに。東中ちうしるりて。あらましき所の
ことをひまいともる海めしくこさらくて。白ひ
かりしるも。いかゞとろかるおぼし給りん。(中ん)さうじ
こともいさゝかうちるびきて。(地)忠しり給ことあるべし。
いこじくおかしげまさりとこそ。ひさつくろひ
のへるさ海はましてこぐひあらじもやとおぼゆ。
さぞかりまき人とおぼくこ給れめまぶよ。(白ん)分しうは
あらずと。かたちよりりじめて。おぼくちるまさるま

あらずとかたちよりりじめて、おほくちかまさるま

しうりとおほさるれば、山里の老人どもはまして
くちつきまくげまうち思ひつゝかくあらしさき
れ有様となれぬるさはの人のこなり給はましか
ばいかまくちおしかりしまし。さしやうなるれすくをと
こゝろしつゝ、姫(大)君の御心をあやしくひがくしく
もてなし給を、もどきくちひそこゝさし也。さりとも
たるさ風どもはおぼやかなる菓の姿ぞまつかり
かしぬをさしぬひこさりて、ありつゝずとりけくろひ
たる姿(すがた)だのつこゆるされたるもなるさ紙こゝにされ
ぬて、姫(大ん)君はれもやうしくさりとめる身ぞかし。
鏡をこれがやをくは女もてゆく、とのがしくは此

人どもく我あしとやハおもへる。うしろでハしらず
がほ。ひるいがこ紙ひさかけつく。文どりさるかほ
げくりとよくしてうちふるまふめり。けが身までハ
まぶいとあれが程まハあらずめもたれもな紙し
とおぼゆる心のなしまやあらんとうしろめたく
てミ出してふしぬつり。ちづしげならん人まこえんん
ことハいよくかるさちらいたく。いま一と廿二年ゆら
ばおとろへまさりなん。ちるなげなる身の有さ海
をとれてつきのほそやかまかりはくおもれなる
をさし出ても世中をしつぐけ給。文(白ん)ハありがたくかり
けるれいとまれほど紙。おぼしめぐらすまゝな紙

けるれいとまれほど紙。おぼしめぐらすよ。ある紙

ちろやすうまじきことよこそもと。いとむ〇

ゆるがりて覚て給ける。大宮の男し給しさ海など

かたりこそしなて。（句詞）むるがらとぐしあらんを。いか

ちるまうとおぼせる。夢までもとろかなるらんよ。

かくまでもまいりくまじき紙。心のほどやいかゞと

（うたがひ）疑て。むこぶれ給ちんが心ぐるしさよ。こゝを（すて）捨てなん。

つねにかくハえまどひありかし。さるべきさ海に

てちかくつかしなるんと。いとゆかく男しなへど。

（中ん）さしまあるべくおぼさるらんハ。とよこさくしれ

心のほどしるきにやと心をうれて。つがれ有様から

さ海ぐ抱なげしくてなんありける。明日程乃

宮ま[旬]いまどをしあけぬて。まろともまいざなひ出
てこぬへば。[旬ん]さりけれるさ海。取りらのあそれおほ
くそひて。れいのしぞつむ舟のうすまりふ。浪君
しら波めなれずもあるすまねのさ海かれと。色なる
れこころまはおかしくおぼしなさる。山のそのひかり
やうくこゆるま。[中]女君のれうちのまほまうけく
しげまてかざりなくいけさすへこゝん姫君も。
かざりとそはおりすべかれ。せひなしれ我ろさ海のい
といつくしきぞかし。こ海やかなる白ひなど。うち
とけてこまほしう。中こなるこうち寸。多の音なひ
なつかしからず。字治りしのいと拘ありてこしける

さるゝなるべ。きりもれゆけばいとゞあらましき
岸(きし)のつらりを。かるところまいりて年をへぬらん
なるべ。うち泪ぐまれぬへる成。いと(甲ん)もづらしと思ふ給。
男(旬)の此さ夜の。かぎりなくなる夜めしくきぶらまて。
此世のこなすゞ頼られぬ思へば。心ならぬりし
ことくは心あるべし。中々かれぬるれたりし。中納言(基)の
もづらしさよりはとおぼし給。かれもおもふらこと
まて。いといたくすこしるなしこれこそまくは
げりしげなりしまよそ(旬ノ事)まに心思へしはまして
こまなくもろかに。一ぐりかき出給れ返しぶる。
つまりしく見えしと。ひさしうとぞし給ちんも。心

ぼそうしんとおもひなしなしも我ながらうしてと
もひしり給へどいたくこはづくりもよほし男也
れば京におりしまさん程りしさなしぬ程ごとと
いと心あもたくしげまて、こころよりほかなしん
夜がれを、遠くのぬふ
白 中さしん抱なしなくまいて姫のうたしく
袖や夜まよぬしさん出がてまたちくりけくやす
らひぬふ
中 さしきじのワがこのこまやうぢ橋のちうけ
さ十と約つるべき

中ことはいでねど、もれなげしこされけるひ。
白ん うざりなくおぼされなり。比つきく人のれころは
ふしぬべく、さぐひすくなげなり。おきけのすが
さぼこをくりて、名ぶとまれるれうつり香(が)なども。
人されず物衣なるいざれこるれこるれ。けさぞものの
のあやめもこ色分程にて、人ごのぞきてこ生る。中(芸)
納言殿ハなつしくたづしげなるさ夜ぜそひ
めつりけり。おもひなるしれ今ひとさいにや。白これれ
さ夜ハいとことにまなどめで罪色。白ん こちすぐしこころ
ぐるしうつるれ気色をおぼし出つて、立もかへり
なまほしく。さ夜あしこさまでおぼさど、世の罪を

志のびてゝへしせ給ほどに。えたちやすくもまさ
れさせ給ふず。此文はあくる日ごとにあまたゝへり
なしせ給。（大ん）どろかにはあしぬにやとしなぐ。おぼ
つるまさ日かずれ川もる紙。いと心げくしにうじ
とさしもれを。身に夜さりて心ぐるしくもあり
れと。（大）姫君はおぼしなげるれど。いとゞこれ君の
おもひ志げに給ふんにより。うれなくもてなして。
こげうらざる。ち紙かうことおもひくさへじと。
いよくかくおぼせ。（芸ん）中納言の君も。約ど紙にぞ
おぼすらんかしと。志やつまて。けがあやまちにいと
おしくて。（句）笑を笑へおどろかしつゝ。こしすゝ乱色を

ゝ給ふ。白ノいとゝいたくおもほしいれたる海なれば
さらさもとうしろやすらかり。九月十日の頃ど
なれば。嵯山のそしきもしひやうくに。時雨めきて
うさくらし。夏のほし雲おそろしげなる夕暮。白ム定
いとゝしげ心なくなるがめなて。いうまきんと此心ひと
けばいてたちの給ふ。蓋ム としたりてまいり給
へり。かつの山ざというるんとおどろうし寝し給。
白ム いとうれしとおぼして。もろもにいざなひ給へば
れいのひとけ此車にておはす。手入給まくにぞ
よいてなるがめ給ふん心のうち。いとゝしたしたれ
[illegible]の頃ども。たゞこれことれこそぐるしさは。

うさらひきてし給ふそれば のいえじく心ばそけ
るるは面ハひやくかはそくきて 秋ちつる氣色の
すぐきまうちしめりぬれぬへるはほひどもハよれ
もれまくず えんにてうちつれぬへるせ 山がけだハ
いうぐろろまどひもせざらん 女がら日ばうちつぶ
やきつる名ばなく 思ふさんへつ おましひきつく
ろひるどす 東にさるべき所どにはりちりたるむすめ
どもめいぐろ人 二三人(ふたりみたり) 弱よきて 氣せたり 年ば
あかづりきてけるろろあさき人ぐめづらかるる
まらうとく むおどろきたり ひめ(大ん)君もありうれしく
おもひきてし給ふ さうしらべ(笠)のそひたまへるぞ

ことづしくもありぬべくな雨けづらけしうせんど
こころだ人のどかな物かくまれし給をげに人(句)は
かくはおもせざりやりとこあもせ給ま事がうしと
むしろ家(句)を所につけてもいとことなりしづき
へなりて、これ荒(荒)はあるじがうるこころやすくまて
なし給物から、まづまらうとぬのかりそ先なる
すまいづしもなちこまへれば、いとかうしとむ
ぬへりうしこ給もさすがにいとおしくて、物づしは
対面(しいかん)し給ふ、こそふれまくもあるかれかくてのこ
やといふじく恨事も給やうく(大ん)ことりしり給ま
れど、人のゆうへまても物をいふじくむしづこ

ねて、いとゞかうかたをうきまれまおまひしてゝ
ゐ代ひたゝかるまいりでくうちとけじおもれと
せふ人の御心も必つしとせひぬべきわざる
しそあめれ我も人もこおとさずいうろたがいで
やこましがれとせふこころづひかくしなへり。
句 宴の御省稽などもとひしてしたまへばかすめつ。
されバよとおぼしてのたまへだいとおしくて。
おぼしたる御さ面気色をこありくやうなどたり
ぞ給例よりハ心うけくしうたひて稽かく抱
せひくたつる程すくし心ちもせづまりて笑むと
の給人まくけど代くハまてたまれぬまれかし。

そうじのるめもいとつかし。しゐてやぶらん
とがけしく。いえじうらんとおぼしられだ。おぼさ
なくやうこそおしめ。かうぐしくことざ後より。
なびきぬつとくはるる。世まあらじと。心のどうな
なひとは。さはいへど。よく心しづめ給。[蕉詞]こゝいと
おぼつかなくもれぬべてこうなん。[illegible]あるぬ心ち
する後。おりしやうまてきてむとゝめしまへど。
[大公]つ○よりも門が面かげまもづかれなれがうとましと
ミぬひてんも。さすがまころぐらしきは。いかなる
まかしほのうまうちけしひぬへるけしひなど。[蕉]おや
しうなつしうおぼゆ。かうれ心よしもめられ

きりてうおまいらるべき身まりともげきさけち
まて例の五条山科まで昨め。文ハまだ指し〇ちすう
らんとも御目さで。中納言のあらじぐるま。ころ
のどかなるきころそうしやまし名れとのなへば
女房あやしと見給ひりなくておうしまして、ハ行
らすくそり給ひおぼずらるし。さるま。ゑやもまれを
いそぐく御ぼしられ心のうち給まり給ひ〇で、女
ぐるま只。又いらるしん。人つくまやとおもひたま
げきのすへ。ばげまころけらしまうしげなする
ワざくれとこも。京まもりくらへてうつり給べき
ところもさらすぐまなし。六条院まハ。古の御目ハとの。

なつるは任ぬひて、さだらりいかでかとおぼしたる
六の表のれこと紙おぼしよらぬよ、なほうらめしと
ひとりゐて給べかり。すきぐしきれさ海に
ゆかしなくそしつ里ぬてうちつたりまもうれ
へ罪給べかれど、いよくおぼしなくて、いざし
すへ給たんもたゞかうこといとおぼかり。なべてま
おぼしく人のさらく家づ人のすぢまて、中こうろ
やすげなり。さやうのなまくまはおぼされず。もし
世中うつりて、こうどこさいの意しとさつかまて
よもおとし海さば、人よりこうさ海ましてなさめ
ひどうだ今ハいと家やうまうろよかりしまへる

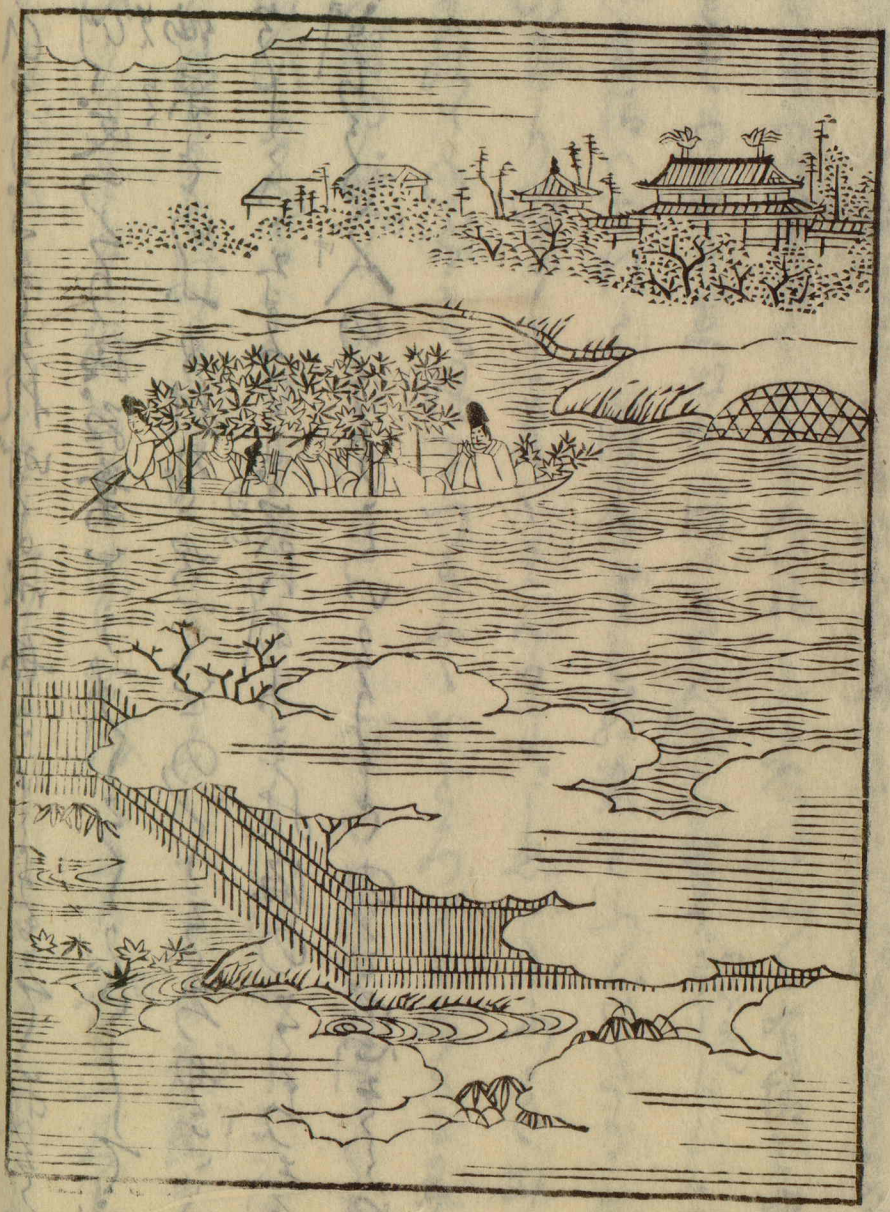
まくまもてなさん方なくくるしかりなり。中納言
三条の家つくりたてゝさうべきさ後までいたし
なしんとおぼせ。げまたて人はそろやすうりなり。
うくいと心ぐるしきれなしきなるがゝやすうぎ悪び
給うらまかくこゝませひなやこ給べかあるこそ。そろ
ぐるしくて悪びてうくうまひ給ましを。中家など
まもなしきうしめさせて。志だしのさいがれを
いとおしくとも。女がたのれたあはさがもあらじ。
いとうく夜をごまあらし給はぬくるしげさよ。
いこじくもてなしてあらせたてまつらじや
などせひて。何ながちまもうくろ人ず。十月一日之そろもがん

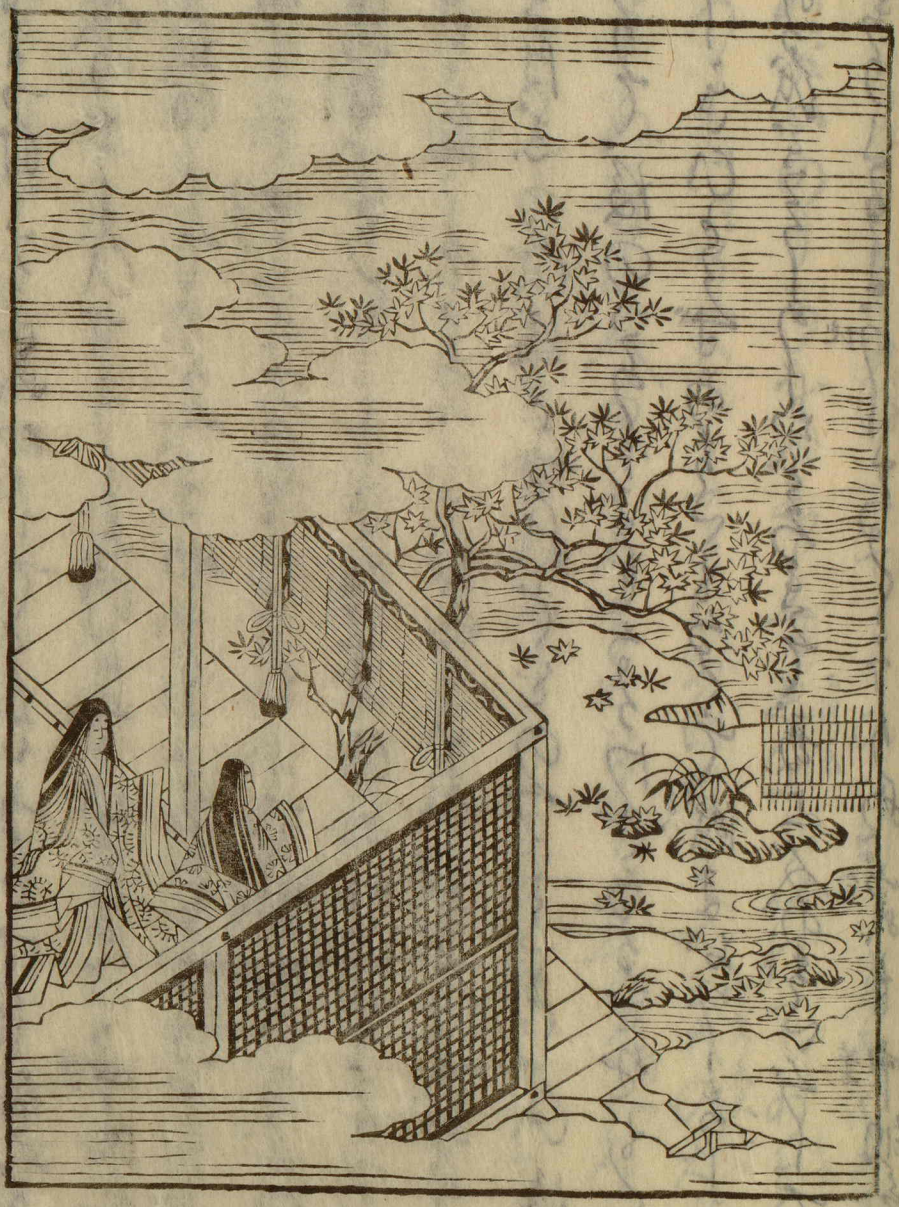
なども。ちかくしくされ候おりかんなどあはれ
して。此ほどのきびしくべきよしなど。二条のゝや
かくきて。かゝり給ひしころのまいりけるもとゝのせ
おはしまし。まかせられべきやうなるなど。いとあはれにて
こゝろしかくて生れ給ひし母ぐゝるもの母のさうりぞく。
此めれとなどゝものゝ給ひしかゞきもとゝのせ給ふ。
十月一日ごろおど（蓋ん）ろもおもしろにはすゞんと。
（白き）そゞのしるしおきて紅葉此んずべくや給。
あるきかさ文がく（ぞ）もと。萩ゞべのむつましくあは寸
うぢかゐともえびてとあはれぞ。宗をされけるにこゝろひ
あれぞのけりこといろごろて。右の（夕）あはいとのく

宰相の中将来り給。さていこれ中納言殿げらりぞ。
上達アいつうまつり給。こゝ人はおほうり。宮語
まいろちまう中やさりし給いんを。さるべきさ夜ま
おぼせ。さ紀の春も蓋こゝ夜の来りこし。これれ
うらこよりまことよきて。時夜のまぎれまこなり
あらもすやうもぞ作かるぞ。こ夜やうま実なり。
大こすうけうへごゝうしてうさもしひ。岩がられり
つまれう紅葉のくち葉すうしもうけ。やつと水のみ
草もしらもせるぞし給。蓋ノ あるくぞ抱されな
ど。さるべきこ人なるゞもまれなり。大ム 川はゆうしげな
なれどいうゞいきん。これ〻さるべきまこそ。ひと也

ゆうして、いまうはしぬへり。舟まてのぼりくだり。こ
ぎめぐり。面白くあそび給も。宮者。ほのぐ宵程こゆる
をそなるゝ。立出て。けうさ人ごこなり。さうじ（旬と云之）この
此宵程いそれとこけ手ども。和葉をふきたる舟
のうぎりのよしきゝこゆるに。急ぐふき出る
もれく手ども。風につきておどろくしきまで
おぼゆ。世の人のあるびきしづきなるさ海。うく志
のびぬへるこちにあるに。けゝことよいけしきは
こ給ふもげに七夕とうれまてもうる彦星（いこがし）志
ひとりをそて給出めなど。おぼしたり。ふこつくら（旬）
せぬべきころまうけるしもうせなどさふし

ひかり。こそかれば。れ舟さしよせてあそび
けり。文つかり給。和葉をうすくうくかざして。海
仙(せんらく)来といふ。もれを吹て。をのくそろゆきこそ
かしきなるなり。家(白ム)はあふこれ海のそちまで。
とちうさ人(仲)のうしこいかりとのこれ心そうせ





時(古代ノ名)まつけうろ(歌)にいたして。うそふきずじあへり。
人のまよひすらしたげめて。おりをんと。中納言(葉)
もおぼして。さるべきやうにきこえ給ほどなり。
内よりも中宮(明石ノ)のおほをごとまて。宰相(タノ子なこ)のあるの
濤の鐘(クニ)ことくしきこ侍ぶひきつれて。うつ
ささ侍して。まりこ侍へり。うゝやうの山あり
きは。志のび給とすれど。をのづからことひ給
ごりて。後のこゝろしまもなりけざるをなもく
しきひとりずあまこもなくて。俄(ほハク)におりしまし
ける後。きこしめしおどろきて。最上人あまこぐして
まりこるは。(地)りしなくなりぬ。宮(句)も中納言(葉)

もくるしとおぼしてものくけうもなくなり
ぬ。れ心のうちをばしらず。思ひこぶれてあそび
あるし川。そふいかくてとおぼすよ。又宴の大ま
さらぬ。夜ぶべるどあまるなりぬへり。そろあ
こくしくて。くちおしくへり給ふんそら
なりしかしこまは此文とぞなれ給。おしやなる
こともなく。いとまめぶちて。おぼしけることぐも
をこ夜ぐとかさづけ。ゆへれど。人めしげく
さはがしかんよとて此色なしかすなしぬ
有さ夜まていめでこされあるりまじらも
むかひなきけぎれと。いとぐおぼしたり給。よそ

まてへぐしか月日はおぼつかなきことなりは
さりともなどなぐさめ給をちらさ程にのこしりおは
しそ・つれなくすぐ給なん・つらくも口おしくもしひ
こぶれ給・宮(白ん)はましていぶきくわりなしとおぼせ
と恨(うぎり)なし・おじろのひとも心をなりて・宮この
木の葉にうきまぜもてあそぶ様・しもべなどは
おかしきことにしへば・人にしるがひ以て・心ゆく
れありきに・こづ(白ん)らのれこちはむ口のこ以と
ゆるがりて・宮をのこながめ給に・此ゆ(八ノ)宮のこぶ忍を
いとことにおもしろく・とさは求にもひまじ・わる
高(つこ)の色なども・抱かげにこして・と様めさへすぐげ

なる紙。中納言（芸山）の君も。ちかくされめ寄しける紙。
うれもしきつぎうれとおぼゆ。こゝぞの君れとも
成し君ぶちは。菊の色をさひ出て。をくれてこゝは
ちがめ給らん。こゝろぼそさ紙いふ。（地）かう思ひくり
うらひ給と。ほのさてこゝろもあるべし。こゝろ思ふぬも
まじつまて。大かゝるよとやかくやと。人のれうへも。
うゝ山がくれなれど。をのづからさしゆゝ抱なれば。
いとおかしげるこそ抱し給なれ。さうの琴（こと）上（ぞ）
まて。こ文の明筆あそびなるかし給なれば。
くちぐまいふ。寧（タノ子息）和中納
（源寧和）いつ。そやも菊のさうりまひとめこし木の中

さんや秋はさびしさおほじまさりていへば中納言
桜こそおもひしらすれさきにほふ花も紅
葉もつねならぬよに徳大寺
いづこより秋はりぬらん山里の紅葉のかげは
すぎうきまれなど家の大夫
こし人もなき山里の岩かげに心ぼそくも
すへるうぐひす中なるおいきにつゐてすみか
のうくおりけるせのしなぐさめならめ家
秋ぞそさびしさ夜さ来の松を吹あらし
そらの松風ぞそいへりあまてらすへるを
ほのぼのとかすみのけばかうくりぼすなりなり の

ほのるまちの人はげるかくあげすなりかりそれの

さらりをゑし給れ心ぐるしきとこなる人あれど
とくしくしつゞきて。えおいしましらず。ほく
まける文どものおもしろき所ぐうちずじやまと
うさもことまつけてあほれど。もうぐしきこと
あしんやはうさくしうきとぐめてぐるこぐるしく
なんかしこは（姫宮遊ん）すぐ給ぬうけもひをとをう女まで
きこゆ。さきのこゑぐこゞなしずあげし給。ろろ
ようけしける人ども。いと口おしとしんり。姫（大ん）君し。
ましてる給をとるまく。風葉の文なるれこうろ
なりかり。ほのるまへのいふをきけばおとこといふ
もれはそうごと給ふそいとよくするれ。しきぬ人を

こゞはならちるすゑの業なりけれどこれ人に
ずちしめをぢしの苦物語に、せ給ふさうらはく
しさきあるにこそいみしうしぬころあるもまじ
ゑしめたるまじくもすぢこそあるに付てはをするに
めれば人の子をまるこくつましう家ちかるべき
まれとむしいさしもあるまじき心ぞあるなり
あさゆめさへるやうなど家はまいらせてつくへ給ひて
かやうにかぢりさい程までいおぼしよくざりし
物ばかりやまさきまで心みつげはのなひつくり。思ひ
みなこさまにつけてさへ身のうさをとひそへ
あらぬかくも有ければこともすうれころ給

らへ門のかみ世中物云もつはら人給しんそくなりを

かけいかれ中納言も、いかにせひ給らんこくありも
ことにはたづしげるかひとはうちまじらるゝど、その
をのせふしんが人ゆしへは、おこがましきことくせひ
こぶれ給ふ。こちもこがひて、いとなやましう
おぼし給。さうしじこは、ふ夜さうに對面し給とき。
うぶりなくふるきことをこれめらぶりこまへれば
さりともこゝにあるいはおぼしかけしじと、おぼ給か
なきも、けりなきさたりこそは抱し給らめと、心の
うちにおもひなぐさめ給ふるあり。ほどへにけるが
せひいまこれ給らぬにしもあらぬに、中こまてうち
ゑのひぬるは、つこうも口おしうもおもほゆるに

いとゞ抱あたれなり。悪びがたきは氣色なる紙。人
なこくはまてなして。例の人めきたるすまね
ならばかうやうはまてなし給まじき紙など。あま
君はいとゞしくあたれとゝなり給。つれも世なり
ながら人がうやうなることゝ何べきまことそあ
めれ。中納言のとき夜かうぞ夜はいひありき給も。
人の心をこんとなりなり。心ひと何はまてこなれて
おもふとも。うしら人やなかぶりこそあれ。ある人
のうりず夜はかうすぢのとをのゝいかでとしひ
ためれば。うろよりほかはつねはまてなされぬ
ぞかりこれこそはかへすくさうちして世を

どかりこれこそいかへすぐさうこちしてせを
すぐきとのまひをきしいかうことまやあしんの
いさめ如かりさもこそいうさ男どもにてさるべき
人どまもとられなしめやうのまれと人ひしへなる
こくとそかる有さ夜にてぢきれかげをさへるや
ましなしんがいうじさぢ紙ひれどまさう抱きひに
しげまずつこちなどいとかくらぬさきり いかで
なくなりなんとおぼしまづむにこちも夜とる
くるしかれば抱も露ばかり来しずこだなりしん
夜のあしましごと紙明雲きひつぐけ給に抱ころ
ぼそくてこれ中君をこまり給もいとこころぐるしう
紙にさへとくれまていかにいうじうなぐさむるかる

なりしん。おそしくおかしきさ夜を明くれのこ抱
まていかで人ごしうもこなしましんと。おもひ
あつふをしそ。人しれぬゆくさのこのこまも
しひつれ。かざりなき人まれし給ともかざり
人口人なるめ候こそん。人の世中に立まじ事。
例の人ざ夜まてへ給りんもこぐひすくなく。こゝろ
うかしんなどおぼしつゞくるに。いふかひもなく。此
世に住いさくかしひなぐさむかるなくて。過ぬべき
身どもなめりと。心ばそく覚れ。こやいこちかへり。
例のやうに思びてとゞでこら給けるを。うぢに
かかれ思びごとにより。山ざとのれありしさも。

ゆくりかなおぼしたりけるりかりがくしたきれ
有さ由と世人もしたるそしまりとなりと濤(リノ一男)の
もしり給かれば中(吟石ノ)家もさうしめしるげき
(今上)うへもいとゞゆりさぬれかしきまて大方ころよ
まかせぬへるれ里ずこのあしきぬかりとさびしき
ことゞもいでまて(内裏)うちまつとさふらいをなり給
(リ)左の大臣(おほいとの)殿の六の君をうけひかずおぼしたること
なれど、そしたちてしまらせ給べくこれさゞめしう
(薫ん)中納言殿さくなて、おいなく柄をおもひありき給
ワがあまりことやうなるぞや、さるべき契や有かん
(ハ)みこのうしろめたしとおぼしたりし夜も衣ま

ワきれがらく。これ表道の此有様けりひもことなる
ことなくて。よるおとろへ給ひんことのおしくも
おぼゆるあまりに。人ごしうまてなさがやとおや
しきまでまてあつかるるに。宮(白)もあやまくにと
ゆまちてをめ給ふが。我(ヒ)がせふりこいことなるに。ゆ
づるく有さ夜もあいなくて。かくまてなしてしを
しへばこやしくも有けるかれいづれもワがまれまて
こまとんにとがむべき人もなしかし。さり返す
物なしのどおこがましう心ひとつにしひこぐれ
給。宮(白)いまして此心にかくらぬなりなく。こひしこ
うしろめたしとおぼまれ(明石中宮行)こころにつきて覚すく

あしに、寝に来しまてれいざ夜にのどやかにまて
なしなへすぢことにむひ笑しこまへるにうるび
こるやうに人のきこゆべかめるもいとなんらち
おしきとおほこやを明られ笑し給、時夜いたくし
てのどやかなる目、女一変のれかたに来りなへれば
お前に人おほくもさかしらずしめやかに絵など
れらんずる程なりれ五丁ばかりへだてくれ、まれ語
笑し給、かぎりもなくあてにそこかきまれかしなる
びかにおかしきれけらひを年比ふたつなき絶り
むひ笑しなて、文これ有さ夜になずしふ人世に
なりなんや、冷泉院の姫君ばかりしそれおほしの程

うちつくのれけるひもころまくてきこゆれどうち
いぞんじまうくおぼしけるまゝなれ山ざとへ人々も
らうけるおそあるこのせゞり著ましきさぞ
しあざえさひ出するやうゞ急しさまさるあすぐさあ
まれ忠どものおほくちりうせにまへばおりしげ
あるも忠どものつどひする男のすまゐなどなきまゝせ
山里のおりしき家ねなどころぐるよれ有様
きこゆる御ぞよそへらるゝこしおぼえてわめとまり
あへばすゞしき見えまでゞしこへそまゐらんと
おぼしめさばござる御所えさそばしまゐらせんとて
ある家の人のむすめとのひとつをそへてつ

あぼすらんせてこしちかく来りよりまて、いまし（白詞）への人も
さるべきほどいへどそなくこそなりして侍られ
いとうとくしうのこまてなさせ給こそと思て
ゆくゆくいへ（女一宮心）ちろ思ほかとあぼすまし（白う）なしまゐ
よきてお前まさしいれゆくる代う（女一）ぬぶして此ん
ずる此ぐしのうちなびきてこぼれ出こるかこそ
ぐぐかり（白心）ほのかまこそまつり給がありずめで
こくすうしもくのへどそこう人とおひ罪まし
かどとあぼすまし志のびがこらて
（白）茅草のねこんもれ見しきもどむすぼれ
こる心ちこそすれ（女一）おまへなりつる人ぐはこれ（白）宮とい

こゝまでかゞやきて、ゆめくしきろまりくれくり、ごん（ぜん）
しもこそあれ、うしろてあやしきおぼさげすれもの
給ふず、じ（白山）きうしまでの引しうしもれをしいひらる姫
思ひまぎれてまうておぼさうし案のうへのさうぶ（ほき）て武
かくさ東代がちまうりしころて給しくが、おまへの此
中ゐ備（つぎ）ろまくおもひくりしころてかくり世まちまく
しづきそのひて、そこふ人ぐもりくうさ
すこしなうめ、東おうなきしきけあまりやんごと
あるさ人の此姫（こむすめ）ちぞもうくおほゆれ心のうつろひ
やすきいめつうしきへぐまぜうちくうてひつき
おぼしき給つゝ代（宇治）わらうをおぼしさうりくおもりあまし

物かしこきはつれなきまで見はへぬ。紛笑えなどしうちは
ふしまどろむ夜も心ちして猶うちあるりと心ほそう
おぼゆる給よ。中納言なりしうちなりもまほしげなり
なかなか見えてねもよりひちなうふと心ちまぎるゝ
折のあはれにもあらねど。ことつけて。対面し給
はず。おぼろけならずけしきおぼしとまりさうなる給
るを猶かやうにおぼゆるおもひおもひくもせちにま
おぼつかなかりきて。ゐるがことにとけてすまひ給
のへるひとの。こすれまへよいれなかうひくちく
いさゝかさしくるしがりめくいおもしろで。
れいしまさげれの人なども見給ふやのれうにも

ゆりでおりし色にし宵程などくらり笑ひなてのど
りまおぼをこころいられしてな恨(うらみ)をこそ給そなど
をしへ笑ひなへばこ(大詞)ゝまはともくもをこそ給そ
ざめりちまき八人のれいさめいかゝりことまこそとこ
ばかぞりなんいとおしかりけるとてなき給氣色
なり(悲心)いと心ぐるしうまれさへまづしき心ちして
世中(間)いとてもうくてもひとつさ夜にてすぐすこと
なくなん侍りせいかなりこと紙もれんじしら
ぬれこころどもまはひとへようらめしなども
おぼすこともあらんをしゐておぼしのどめる
うしろめたうはよまあらじとなんはまひ侍など

人のれうへなきへあけなふもかけきあやしく
おぼゆ（大）よかくいましていとくるしげる志給なれば
うとき人のれけたひのちかきも中の君のくるし
げるおぼしこれば右紙側のあるこまと人ぐ四方
れどまして（葉詞）くつづしひ給ほどれおぼつかなき紙
おひのまくる氣りきていぐしたるちこまへれば
いとつりなくなん。かかありのれあつかひもこれ
かはたかぐ志くつうまつかなど。弁のおもとる
かたらひなて。こす法どもりじむべきことなどの給
いと（大心）こぐるしうぞとさしかもいとりしき男をとき
きなへど。おひぐ夜なくの給へんもうこそあれば。さす

がよなどしへよと（葉ノ）しひ物へ家心だ人も衰なり。文の
あしたに。すこし（葉行）もよろしく御覧さるや。唯日（きのみ）ばかり
まてざるまさしさせんとあれば。日比（大行）ふれがまや
々ふはいとくるしうるん。さらばこゝろまといひ
出しぬへりいと（葉ん）衰にいかに抱しぬべきかりか
あらん。ぬりしよりはるつしきれ気色なるを
胸（むね）つぶれて見ゆれば。ちうまりてよろしのことを
罪し給。くるしうて（大行）え罪ず。すこしあらん程に
とて。いとくすかに衰なるけしひをかぎり（葉ん）なり心
ぐるしうてなげきぬぬへり。さすがにつれ〳〵と
くてかりしがたれば。いとうしろめたくれど

くり給(詞)ふるれすまねはなほくるしかりけり。と
ころさり給ことよきて。さるべきあまうけん
りしまんなどゆゑしをきて。河(あざ)岡(ヨ)案にもれ行ま
心にいるべくの給ひしまて出ぬめ。此(芸)恵のれともなる
人のいけしかと。そてなるけうき人とうらひより
うるありけり。そのがぞくの抱(芸倍詞)にふれ(白)宮のれ悪び
ありき制(せい)をしれぬて。うちにのミこもりおりしま
すこと。左(夕)の大臣殿の姫君をなん。河にせまりぬふ
べかるなれ。女ハ年ごのれほいなれば。おぼしとゞ
をほうことなくて。としのうちにありぬべかるなり。
宮(白)はしぶくにおぼしてうち(門葉)けうにもとゞすま

かほしくらくはれ心をいれてみ(全)かどきさい(宮の中宮)し
れいほしあはしげまり給べくもおはしましげ殿(荘)
まそある殿おやしう人は紙給ずおほりまめす
おりしおしてゝ人はほとそあやまれのへてようく
けうり給のこあんめともおやはおぼろけあらめこと
とゞ人ゝあるべくうけう殿ざそていひつれちゞ人ゝぐ
の中まてうろうを字(太)給よもいく(大ん)じゆかうがうて今
いうぶりはしそおあれやむごとあさらはさゝまり
給ふめ羽のある殿ざりのれすきひはうくまでおぼ
しぞんとぎすゞは中(荘)納言あるのかもしん承殿
かぼしそゞ云のしのふぶりかうさあるりやりとせひ

なし給ふ。とも、くも人のれつゝさはせひ出られず。
いとゞ男のとき所なきこゝちして。しほれふし
ゐつり。よもされこゝちはいとゞ世ゐこゝちとまゐ
べうもえらず。もぐしげなる人ごゝはあらねど。
おもふらんところくるしそれば。さゝめやうまてね
ゐへるを。中姫君ゐ時のけぎと罪しうこゝねの
れさ後のいとらうこげまて。かひな代まくらまて
ねゐへるゝれぐしのこまりこゝ程など。おりがこう
うつくしげなる代大ゐやまつて。八おやのいきあし云の
くも。西くせひ出られまてゐるしそれば。いゝふゝ
んなるそこなりはよもしづゝ給りじ。いづくまも

いづこまも。おもすしんかるまむ人あてよ。うう
いうじく抱せふ身どもとうち挽(すて)あて。愛まぐまミ
え給ふぬよとせひつけのふ。(比)夢の色は氣色いと
すぐく時雨て。木のしたる吹ちらふ風は春などこと
へんかるなく。しうしかるけさきはもひつけられて。
そひかしのへるさ雨。あてま限なくミし給。しろさ
れぞまかミいけづることもし給ちで。ほどへぬれど。
雨よふすぢなくうちやられて。日ばますうしかを
ミのへるしもう雨めしさ雨さりて。ちがめのぐし
のへる。まこひたいつきのほども。うしらん人ま
ませまほし。ひかりの(中)君。風のいとあらきまおどろ

うきれて、おきあがりおへり。やまぶきうす色など、
黄やかるかいろあひに、れかほそこくさうにそ色
にほひしたんやうに、いとおしうくれぐとし
て、いさくか抱きかべきき版も志すへらず。こうる(中伺八)志
夢にこしおへる。いと抱おぼしたるそしきまて、此
ゆたりにこそほのめきおへれとくたりたまへれば、
いとど(大ム)志くかるしさそひて、うせ(伺)おて後いかで夢
にもこなたんと志ふ後、さしにこそこなしとて、
ふる所なかしいとじうなき給。此(大ム)此明嘗志ひ出
なれば、ほのめきもやおとすらん、いかでおりすらん
所に君家らん。つゝふかげなる男どもにてと。のちの

せをさへせひやまゝ給。人の玉(ぎょく)にはりけん番(うう)の煙(けぶり)ぞ。
いとえまほせしくおぼさるゝ。いと(地)くらうなる程に。
(句)こやより此使あり。おりいすうし抱せひなぐさうぬ
べし。此(中)なるいとこまもこ給ちず。なる(大詞)代心うのくしく
おひらうなるさ夜に寝しぬへかうでしらるうも此
侍りなぐ。これより名はなきまにもてなし寝ゆる
人もや出こんとうしろめたき代。まれにも此人(句)の
せひ出さてし給へんにさやうなるおりまじき心
つゝ人いえあらじとせへばつらきながらなん
これまれ侍ると寝しぬへば。(中詞)をくらさんとおぼし
けるそいとどうけれといよくほとひきいれ

絵（大詞）がさりあれば片（る）時もとまらじとおもひしかど。
ちがしかるつぎ女をうとせひ行るぞや。あすこしぬ
よれさすがまちげしきも。御（た）がこめおしき命ま
かいとて。おほとちぶらまつらせてこ絵。れいのこ夜
やうまうさぬて

（句）ちがむれば。おちぐ雲ゐといかるれど。おほほう
ちさ。そふる時毎ぞ。うく（地）袖ひりうるどいふこと
もやありそん。（大ム）こくなれまうるとちがあしじとく。こ
ちまつけてもうしめしさ夜さり絵。さぞうり世ま
ありがこさ。此有様うちは。いとしいつで人まめで
らわんと。これましくえんまもてちしぬへれば。

けるさ人のころろよせなり給ちんもとくりなり。往(中ム)
ゆるるつけてもとひしう。さぞうり所をきまで整
を給給しをさりともいとくてはやまじとおひ
なをれ心ぞつるるそひけり。此返と東京りなんと
ことゆれば。これれそぐのしきゆれぞ。ふぐ
ひとことなん

中 あられ山の深山の里は朝夕まなかむ雲も
りきくしつ。(地)うくいふも神無月の川ごもり
なりけり。月(白ム)もへぐうりぬるよと。(白)実は志げ心すく
おぼされてと東くとおぼしつ。武ちりおぼし
なるほどる。五節(せち)などくいでさるる年にて

さらにさらいまめしくまゐれがちにて、ひざと
もちまれどすぐい給行ま、おさ御しう給ど給なり。
さらなく人（中）とゝ給まつけてもさらハれさらなり
さらなくおりなし。左の大臣（タ）殿のひさりのこと、大（四石中文詞）
家も私さらのどやかなりれうしろこ給まうけ給
てその間かれ易ま間しうおぼさらく人おしらバ来ら
まて。とも〻しくしくまてなしぬへと思ひぬへど。
しぐし（白詞）さしふまゐりやうなど思ひいなびぬて。
まことまつしきめはいかでかゝきんなど。おぼすれ
心をしり給ふ事ハ月（宮法姫遊ん）日まそへて抽をのこおぼす。
中納（兼ん）言もしし行ようハかろびさられ（白ノ）心かれさりとも

とものおとこしけるもいとおかしく心うくおぼしけく。
おさくまいり侍らず。山ざとにはいとよくくと
かの男侍この月とありてはすきしあそびあり
おもすく男侍けるよ。おほやけにて、あはれには
げしきろまで。五六日人もそこまいり侍らねよ。
いろゝんとうちおどろかれてけりあさきとの
あげず宇治うちすて宇治へまうで侍ず。法にまいりて
侍までとの侍ひまけり侍。ころもなく姫まけりとて。
ひぐらしともおもし侍られいと人ずくなるそて。備
の弁おい人いでこそれ官侍ありく。弁内侍そこいはといひさ
ところまるく。おどろかくしらぬれるやうよ。地を

七十七

なん文にはさしめさぬ。もとより人にて給ひず。けん
うまなりしますうちに。これ宮(旬)のれこと業にしの
ちいとゞ地あげしたる歳にて。ぐるまされぐる地
ざるゆゑんじいれざりし稜(つま)りにや。あきましく
よそくなりぬて。さらにこれひべくもこし給ひず。
世に心うく給ける男の命なりきにてかゝる事を
こまれば。先(まづ)いかでさればこちにさしなんとしふ女へ
いりて給と。いひもやらずなくさ歳にとりなりなとう
うくとも苦(つげ)給はざりける。院にも内にも。なきましう
事しげきにて。日比もえ冥ざりける。あげはか
なきとて。なりしるに入給。れ(大ノ)枕がしらくて物

ふるくぬ人ど（大）れこゝ思もなるさやうまてえいらん
給ひ（芝河）ぐくをもくなり給まて雅もく苦（つげ）ゝ海ハ
ざりけるがつゝうしつゝまかひなるさゝとうしゝて
例の何ざり給ひ世ゝまゝしゝ何りと字ゆゝ人の
かざり給まゝ此うじ給れ（こぞ）修法（ぞうど）讀經（きやう）何くる日より
ちじめさせ給ひんとてとれ人あまゝ来りつゞひ
うこしもれ人こちさけぎこれバこゝろぼそされ名称
なくこれらしげなり當ぬれバれいのあるゝまと
罪して此ゆづけなど来らせんとすれどをくてさ
まこまらんとて菊のひさしハ僧の雇なれバひがし
なもての今すらしけぢうきこゝろ扉風などこて

さきて いりぬ給。中の君くるしとおぼしたれど
れなる様なる様まてもなれ給はぬなりかりと。これ
もひて。うちくもまてなしへぞてましぞ。そやより
もじめて。法花経を不断（かけきり）よまを給。声さうとさ
かざり十二人をして。いとさうとし。火はこなるの南乃
まるもしもして。うちはくしたる。其（笠）をひきあげて。
すくしすべりへてこそまつりぬへば。おいぐ人ども
二三人ぞさふらふ。中の君はゆとくれ給ぬれど。い
と人ずくなる。心（大ノ）ぼそくてゆしぬへる様なるどう（笠詞）
れこゑをぶるさうせ給らぬとて。れをとしんて
ぬどろうしきそしぬへば。心（大詞）ちまは覚しながら。まれ

いふがいとくるしくてなん。日比者づれ給ひざる
つれば。おぼつかなくて色ばりぬべきまやと。くち
おしうこそ侍つれと。いきのしたよのぬふ。笠詞
まされまらつる程まで。来りこざりけることして。
さくりもよくとなきぬふ。大ノ此ぐしなどすくしあけ
くぞおりしけるなまのつゝなりれくちよかへの
なげきおふこそかくいあんなれと。此こゝにさし
あてく物をおぼくさくしぬへば。大ん うさうもたげ
うしうもおぼしてかかをふくこざこまへり。いとゞ
なよくとあしかまてかしぬへる後。笠ん 兎しうえ
なしていかるうちをんと。胸右もひしまておぼゆ。

日(詩)ばこなりぬへらん此心ちもやすらぎ(中ソ)ぬ(ぬ)さい
つらんと夜ごまころやすくうちやすきせぬへ
とれぬべきふしふべしと思ひぬへ(中ん)うしろめた
かれどさらやうこそいとおぼしてすうしきぞき
ぬへりひ(笠)たおもてはあしるどうひよりけくこ
なりぬへ(大ん)いとくるしくもづしかれどうくる
べき歟こそはありけめとおぼしてこまなうのど
やかうしろやすきれ心とかれるつるの人(句)は
こくらべなりぬへ(ば)おもれともしひしられまうり
せるしく此なん後のしひ出まもこころごとくしひ
ぐ夜ちましじとつくこぬてけしうるくもえとし

こゝろ給ふず。東(菫)もすぐら人をそゝのして。ゆ
ゆるどゝ思ひせまりぬへど。落(大)ぐらり年ゝ氣色もれ
し。いそじ(菫ム)のつぎやいかゝしてかハかけとくむべきと。
いたんかたなくさひぬぬへり。不断(ふだん)經(ぎやう)のあり月が
これ。ぬかゝりたゝ急のいとこゝしとさまゝ。つぎり
もよぬまさつゝひてねかりたゝ。折おどろきてぶつ
まゝむ。おいかれまれどいとくろづきてこれ申し
うつ日。いかぐ(あざり詞)と東もおりしましつゝんなど。きこ
ゆつゝでま。右(八)宮のれことなどゆゑしまて。これ志ぐ
志ぐうらゝて。いかるかさゝろまおりしますらん。
さりとも隣しきるまぞとさひやつとすゝどゝいろ

ころの夢になんしおいしまして、そくのれうこち
まて、世中をかういとひこなれしかば、こころと
まることなりしを、いさくか打たひしことなり
こゝられてなん、こゝ志げしねがひのところをへだて
らねるとおもふなんいとくやしさ、すくむなわざ
をまといとさゞかるおほをられしを、こちまちる
つうまつるべきことの苦し侍らねば、こへこゝなり
しこゝがひて、をこちひし侍る、法しがらみ六人して
なるがしの念佛（れんぶつ）なんつうまつらせまべる、さてハ
しひのへえこゝろこと侍て、常不輕（おやうふきやう）となんつがせ侍る
などしする、其（芸）もいこじうなき給、大（ん）れ世なりさへ

さ海たげきゝゆらん。つゝの程をくるしき心ちにも。
いとゞきし入ぬがりおぼし給。いかでかれまゐさゞ
まり給いざらんさきるまうでゝおなじ所にもと
きてかしぬへり。おぼりはとゞずくなまて立ぬ。これ
常不恒（ぢやうふきやう）。そのほとりの星ぐ。家までかりきけるが。
暁（あかつき）の風にまぎておぼりのさゝふあたりをたゞまて。
中門のもとにゐていとたうとくけく。恐かうの寸
恐つゝのころぐへいとあられなり。まゝうとも
しるゝにすゝこゝろ仇心にて。哀しれだれ給ひず。
中の君をちにおぼつゝなくて。おくのゝなる
末松のうしろにより。ゐへるけしひと字ゐひて。おぼ

やかまねちをりゐて不(行)粧の声もいかぐ望せのひ
つゝんをもくしきたまはをこゝろもぬことゝなれど
こうこくこそもべわかれとて
(葉)しもさゆる汀(ミぎハ)の子鳥うちまびてなくね
なるしき軽ばらけかれとこと葉のやうに望し
給つれ(中ム)なき人(白)のれけもひまもからひて思ひよそへ
らるれどいらへまくて弁してぞさへし給
(中)あり月の霜うちもしひろくな鳥物しふ
人のころをやしる

まづ[行]しからぬれかたりなれどゆへなからず
きそくなれ。[荒心]やうのたちなしごとも。ひくまし
げなるもれとらなつかしうかひあるさ海にさり
なし給もれなれいまはとて別ながいかなるたちち
きんと志ひまどひ給。[八]宴の夏にこし給けんさ海
おぼしあもしすなるかう心ぐるしきれ有信どもなれ。
あまかけなてもいかにこ給らんとおしたらられて
おりしましくれてらにもれ涌程ときせ給。取ぐに
れいのりのつひ出しとてさせ給。おほやけにも
ひとくしにもれいと海のよしゆゑてまつりいらへ。
よろづにいたらぬことなくしおもへど。もれくつき

めきこゝろれやまひまもあらざりれば、なるのしる
しもえしず、ゑ(地大ノ事)ぶりしもこゝろまあらんと、ほとけ
とも念じ給ふにこそあらめ、なほ(大ム)りうつゝてま
いりでうせなん、これ君(甚)のうくそひなて、おなくなり
ぬるほ、いまはもてまるれむるなし、さりとてうし
とろうるしずゑもめうころだへのゑとさりして
けれも人もえしんが心やすからずうかうべきこと、
もし命しなてさまらば、やまひまことつけてかる
ちほもかへてん、さてのゑこそながき心ともかるゑま
ゑちけべきけぎなれとさひしゑなてとあるまて
もかるまてもいりでこれ(出家ノ事)せつとしてんと見すほ、

さ後でさりしきことにえうち出給ひて、仲の君の
心ち（大司）のいよくこれもしげなくおぼゆる候、いむこ
となんいとしるしなて、命のぶることを罪しを、
さやうにあぎりにのこまへと罪しなへど、これ
なきさはぎて、いとあるまじきれ事（こと）なり、うく
斗（ばり）おぼしまどふめる中納言（芸）殿もいうぐあへなき
やうにしひ罪し給ひんとよげなきことにしひて、
これもしべ（あざり）にも上つぎ（大ん）ばちおしうおぼす、うく（芸）
こもりぬぬへれば、さくけぎつれとふひにふり
とへ抽志給人もあり、そろうにおぼされぬことこそ
なれば、これぬべしさしきけいしなどに、そのく

よろづのれいのり紙をさせ歎（なげき）アカ也。（蓋ん）とよれあるりは
そのぞうしと。京おもひやつ給。風いたう吹て。雲の
ゆるさ海あれたてしうあれまどふこやこまはいと
うしもあらじかしと。人やつとなるぞ心ぼそう
て。うとくてやこゝめべきまやとせふ歎につゝそれど。
うしむべうもあらずなつかしうらうたげなる御
もてなしをたゞしぞしまても。例のさ海になし
て。せひつゝとぞうたゝとぞやと。せひけゞけて
なぐめゐふひうもなくてくれもてぬ
（蓋）うさくもり日かげもえしぬおくしま心をくらす
比まもあるは。たゞかくておもすうをたれこゝまこれ

せひきそしたり。例(業)のちうき方にねぬへるこさ丁
ちどを風のあらハにふきなるをば。中の君おくに
いり給。えぐるしげなる人ども。うくやきうれぬる
行に。いとちううよりて。いうぐおぼさるくうちうり
せひ給すとなく。念じ罪ゆるひなく。此声を
ごるこさうず。此にこれば。いとこそ。侵(ほび)しかれ。とくら
うし給。ちぐいえじうつくうんと。なくくきこそ
給。大も此。荒しずなりにうさ夜なれど。夜をばいと
よくうしぬへり。(詞)よろしき陰(ひま)あらば。罪ま夜しき
ことも侍れど。ことごとし入やうにのこなりゆくは。
くちおしきわざにこそといと哀とせひうまへる

氣色なるよ。いよ（蓋ん）くきさとじめぐさくて。ゆくさう
くころぼそげなおもふとはこしじと。いくこ給
へど。こゝ思もおしまれず。いかなる聲まてかぎりなく
さひこさてなるがらつくさことおほくて別なるべき
まゝすくしうきさ夜をどなこせ給ちぐなん。おもひ
さ夜すつしまもきんとまれど。いよ〳〵衰げな
あくしくおりしきれありさ夜のこみゆゝいな
などもいとほそうなてかげのやうよはげなる
抱かゝ。安あひかりしぎさろうまいくしげよ。なよ
なよとてさろきれぞどものなよびかなるよ。
みすまをくしやまてなるよ。男もなきひねなる波ふ

ふすまをくしやまてなるは男もなさひねる法ふ

せこゝん心ちしてれぐしいとこうしこうもあらぬ
ほどにうちやられこる抗よりあちこるさいのつや
つやとめでこうおりしげなるもいかに奴給なんと
するぞと有べき抱にもあらざめりとこゝろがあし
きことこゝぐひなし大ゝらひさしくなやこそひ
きもつくろもぬけたひの心とけずとづしげに限
なうもてなしさ夜よふ人にもおほう夜さりて三夜
なにうまくに玉志ねもしげまゝんなるしつねに
うち抗ぬてハ世に志げしもとまるべきにもあら
ず命もし限ありてとまるべうとも ふるさ山に
さすらへなんとすらぐいとこゝろぐるしうて三まり

給はんれこと候なんなまひ事ゆゑと。いらへをさせ
なんとて。かれ此とをかけ女へぞ。大ほかくし給れ
袖をすてしひきる候して。詞くたれかなけな
抽候。さひぐ夜なさやうまなぼされたりつゝもかひ
なされば。これとまり給いん人中をおなじことくさひ
きてしまへと。ほのめしきてしまふ。こゞへ給え
ざらましかば。うしろやすからましと。これのこなん
うらめしきふしまて。大ノ会が。とまりぬべくなぼしそべると
の女へが。業詞くいこじう抽さふべき男にやありけん。
いかにもくことぐ夜に。この世をさひかゞでふかる
のゆらざりつれば。れおもむけれしこゞへ
きそしずなりまし。今なんかやもう心ぐるしうも

きそしずなりまし今なんらやもう心ぐるしうも
あげゆるされどもうしろめたくなせひきそして給そ
などうしらへていとくるしげにしるまへが修法の
あざりどもめしいれさせ、ざ間ぐにげんあるかざり
しそ、が持来しせ給、我も佛を念ぎさせ給ことかざ
まなし世中をこと更にいとひまゐれねど、すくめ
給仏などのいとかくいうじきまれはしたまを給にや
あらんうるまくに拙のれゆくやうにて、消りて給
めるはいうじきつぎられひきさらじむべきうるなく、
あしずりもしのべく人のうくなしとこんことも
見しずかざりとこまりなひて、中の君のをられ

じとおもひまどひぬへるさ海もことゝもりなり。あり
まもあらずこし給をれいのさしこき女がら。今も
いとゆくしきことゝひさゝけなり。中納言の君も
さりともいかゞかうことあらじ。爰かく見して。
此者ともかぶら代ちうかくげてこなり給はかくし
給新もこゝねさまへなやうまてかりぬへる所も
なくうけらしげまてうちふしぬへる代がくしなが
りむしのうらのやうまてもこうけざなるまし
かぐとおもひ海どもる

いまもれことにもすゝれぐしをうきやうまさと
うちにほひたる。たゞありしなぐらのにほひ。
なつしうかうだしこさもはりぐたう。なまごとにて
これ人をすうしもなれめなりしとおもひ
さ面さん。面ことは世中をしひすてもけるしるべ
なしバおそろしげようきことれかなしさもさめぬ
べさかしをぐるこつけさせたまへと。佛を念じ
ぬへど。いとゞおもひのどめんかたなくのこあれど。
いふかひなくてひたゝかるる煙(なり)にぐるなりしもて
てんとおもほして。ごうく例のさほうどもするぞ
あきましりけり。笑をあゆむやうにたゞよひけり。

おきましかりけるを、をあゆむやうまさぐよひけく。

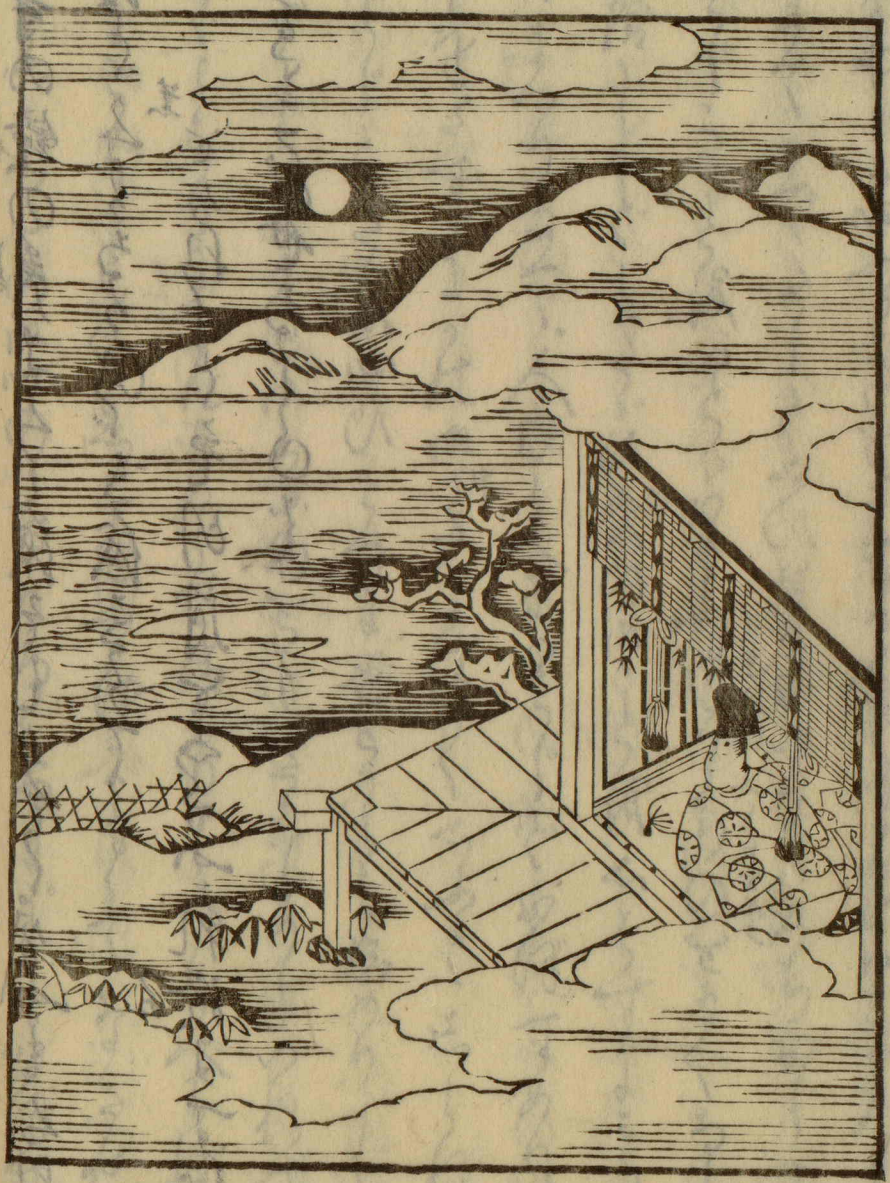
なぐりの御りさ海さへもうちげまて、燈もおほく
むすばれ給ひず女ぬるもあへるしと、あきれて
入り給ぬ。れいこまこまれる人ずおほくて、うろ
ばそさはすうしまざれぬべかれど、中の君ハ人乃
ミしふくんことも、とぐしこさ身の心うきをしひ
しげミなて、又なき人まこし給。宮(匂)よりもれとふらひ
いとしげくなれ給。しかもず(中ん)まつらしとしひ、男人
ましかしこともおぼしるをとて、やミぬるをおぼ
すまいとうき人のれゆりや、中納言(荒ん)くせのいと心
うく見ゆるついでまおいとげんとおぼさるれど、
三条の宮(女三)のおぼさんことまとぐり。此君(中)のれこと

の心ぐるしさとは、しひこぶれて、坂の給しやう
まて、形見にもしるべかりける物を、しるくの心は身を
分まつりとも、うけろふべくはおぼしざりしを、うう
まれおもはせなるよりは、こゞうちうちひてつさ
きぬるぐさめにもこなりかしまし、まれとなるぐ
おぼす、かりそめに京にも出給はず、かさ絶なぐさむ
かたなくてこまりおもすれば、世の人もそろかなるず
しひまつるとゝ三字て、うちよりとゞめなりて、
れとふしひおぼかりそろなくて日ごろも色めし
七日くのことぐもいとこうとくきさせ給けるを
ろかなしずけうじまへどうざりあれば、それぞれ色の

風のいとをげしかれぞしとこおろさせ給ひ
四方の山のかくみとこゆ汁の氷月かげまいゆ
おましろし京(茎ん)の家のうぶりなくとこうくも元
かうはおしぬもやとおぼゆ。けづまいさ出てもれ
ぬ給はましかば。まろとも。まさこしましとしひけぐ
くるぞ。胸(むね)よりあまるこちする
(茎)恋まびてしめるくすりの床しさる雪の山
よや給をけるまし。なかばなる偶(げ)なしへん鬼も
かれとことつけて。力もなげんとおぼすぞ。心(比)ざる
なきひぞりころなりけり。人(茎)ぞちうう呼(よび)出めて。物
給ひなどきさせ給。けるひなどのいとけうまはしう。

のどやかに心かうきをこなる人ぞ。けうさいろろに
しめてめでたしとしひなり。おいたるいろちおしう
いうじきこと紙いとぐおもふ。れうちのをもくなし
せ給しことも。たゞ此句の御こと紙しちずにこそ
てまつりぬて。人けし人にいうじとおぼすめり
しを。さすがにかれ中たるには。かくしかとしられ
なしじと。たゞ御心ひとつに世をうらこと給めりし
ほどに。たゞなきれんぞ抱をもこさうしめしいれず。
たゞよもりまるんよりしせ給めりしうちべには
なまじりことくしたく。抱かげにもくてなきせ
給ふで。したるの御心のかぎりなくなまごともおぼす

寺の鐘の声まくら紙そぞぐてく風ふきくれ
ぬとかすかなるひぐき紙きてて
蒸とくれじと重り月をしるふれ終ますむ
べきこの世なるしるべし



うちらぬ紙、かれれうるのうろよせけさうりし
人ぐのいとくろうこさへうる紙ほのこ給も
薫紅まおけるなるぐもかひなさハうるこれ女を
そあぬなりかり、ゆうしいろのこほりとけぬうと
こゆう紙、いとぐぬらしそへつるぐあ給さ海、いと
ち海めしうこさけなり、人ぐのぞさつこまりて、
いふかひなされこと紙ばさうもれまて、これとれく
くこるらひなりて、いまはとよそまさひ四九こん
こそ、あさしこしうロあしかれ、おもひのほかなるれ
すくせまもおりしけうれ、かくふされこうろ乃
行と、うるぐまそむうをあへうよとなさあへり、

中
これれうたまは芳(芸詞)のれうたまは今はちまごとも
はたしうけ給たしんとなんおもひおもふ。うとく
しくおぼしへだけなと罪しなへど。よろ(中ん)げのこと
くさ月なりやうと。抱のミけくましくて。まだ對面(こいめん)
して抱なども罪し給はず。これ(芸ん中)君はけぶやかたすり
うたま。今すこしこめさけたくおもすりまれかし。
ちかしうにほひおかころざ海ぞ。せとりなへ
けるとことまふれておぼゆ。宣のうきくらしぬ。
日ひ日もすまながめくらして。世人のすき海ぞさ
ことまいふなり。しもすれ月夜のくもりなくさし
のぞこる後。すぐれ巻あげてミなへば。むかひたい

めりしはこ家のれいましめまこへゝがひぬること
とおいなう人中のれう人をおぼしなやこそめし
なりと罪てありくはの給ひしとなどかなり
此つて誰もくなき間どふこくつきをず、けがこころ
うしなりぢきなきこと後世ませなりけんとて、とり
へさ間ほしくなべての世もつゝさま、念誦せいと
衰はしまして間どろむ程なく何し給はまぶ夜
ふかき程の雪のけそひいとさむげなるは、人ごゝ思
あまるまてむまれをとく罪也何人かはかくるさ夜中
はゆき後けくべきと、大徳こちもおどろき思人
なは、家白りのれぞはいたうやつれてぬれく入給

なりそりうちたてさ給さ殿さなく里とさてなひて
中納言いかくろへたる事に入なて、思ひておもす。此
いこい日数ありたりそれど心浮なく思し儀て、東一
東ゆきまゝまどいされてぞおりしましける。日比のつら
さもまぎれぬべき程なれど、對面志給べきこうち
もをず、おぼしなげきたる殿のもづしかりしを
やがてこゝろ浅され給もずなりましも。今より後のれ
ころあらたまらんいかひなりなべく、思ひ志こて
抱志ゐれば、誰もくいとじうことなりをきたく
志しせしけ、抱うしまてぞ日比のをこたりつきせず
の給をつくぐと里ぬなへる。これもいとあるか

なきかなてどられ給まじきまやゝきしぬる所
けたひの心ぐるしき紙うしろめたういうじと実(白ム)も
おぼしたりそふいれ身をすてくさまりなぬ抱ごし
ちしでといたくまびなへど今(中詞)すうし抱見ゆる程
まて待しばとのこ字にまてつれなき紙中(慧)納言も
かしおきくなてさるべき人めし出て此(詞)有き海に
さかひてこころあきさやうなるれまてなしの苦も
今も心うかりけり月ごろのつこいさもしひきて
なひぬべきことなれどまくらぬき海にこそかう
ぐへなり給ひあがやうなることまぐこしらぬ此心
まてぐるしうおぼすんなどしびてさしがり

ぬへぐ、いよく（中ん）此（菩）の此心もちづしうてえ罪し
給ふず、あきましうろうくおりしかり、罪（白ん）し
さ面ともむげにつまれ給けることくをろかなしず
なげきくらしぬへりよりの気色いとぐたぐしさ
風の音に、人（中）やまなしずなげきかしぬへるもさす
がまて、例（白）の物へどてくさて給ふじのやまろをひき
かけて、ひさきなげきこと紙弊きてし給も、いぐ（中ん）
かくくちなれ給ふんとこころうそれどよそまてつれ
なき程のうとましさより、哀に人の心もこをやぎ
ぬべきれさ面紙、ひとうこともえうとこもつまじ
りかうとこだつくぐと罪給て

中きしうたをせひ出るもそうなき紙の来うけ
てるまとのむらんと得のるの絵中こいぶせう
うろもとなし
匂の来紙らじうき袖とせひなばめれまへそ
ざまそむうざらなんなるごともいとうこうほど
なさ世をつゝふくなおぼしないそとよろげる
うしらへぬへど中うちもなやましくなんとていり
絵まそり人匂のこうしんもいと人まろうてなげさ
おし絵うしうんもことそりなる得どなれど
あまりは人まくまとつゝき泪のおつればまして
いうませひつゝんとさ角ぐあれまおぼしせる

中納言のあるじがうるすこなれて、人ごやすら
うまよびつかひ、人もあまたまして、まれ来たせなど
志給をおこれまもなかりしうも明らんず、いといたう
やをなりこゝぼれぐ志きまで抱をしひこれど心
ぐるしとこゝぬて、まめやかまとかひ給ありさ海
などかひなきことなれど、これ家ることは罪しめと
ぶんど打いでんまつけてもいとうろよもくうつく
なしくこしなしんまもぐりてことずくなすくは
自ん
れとのこゝなきて日かず風まされば、ゆがもつまたい
しうもこぐるしくはあしでいよく、まれきたげは
なまめいたるを、あるしばうるしず心うけまもなんと

とのがたしかしぬれそろなしひまおぼしよりも
ち後うしろめたかりければ、いかで人のそしりとも根
ともしぶきて、京まうけろしてんと覚まく、中
つれなき物かし、うち門裏ひたりまもきうしめしていと
何しかるべきるおぼしけびて、かふいかへらせぬめど
ろかなしず云のもとけくしぬへど、中ふつれなきは
くるしき物をとこふしをおぼししらせまほし
くて心とけずなりぬ、芸ふ年のくれずまはりくら思ふ
ぶる、宅の気色例まハ似ぬをおれぬ日なくふりつむ
雪まうちながめつゝあくしくらし給こうちつき
まず夏のやうなりけりぎもいかめしうきさせ給

句
家よりも此誦經(ミぜこう)などこうしてさまでとゝかひ罪を
給(芸ム)くてのこやはあらしこさとしさへなげき
すぐさん。こゝかしこゝかもあぼつかなくて。さぢこまり
ゐへることを罪をゐへばいまはとてかへり給ふん
こゝちもさとへんかるこなし。かく(芸ノ)おりしなひて。人
しげかりつかなぐりなくなしんを。しひけぶ家人ぞ
いうじかりし物のさしあたりてかなしかりし
さはぎよりも。うちしづまりていうじく覚ゆ。時ごおり
かしおりしやかなる程にさそしかうしゐひし
年代よりも。くのどやかまてゐしゐへる。日ごろの
此宵を海けたひのなつしくなさけかうしもかなさ

ことまもまめなるかたまもせひやつまおぼかなれ
心ぢんを今はかぎりまこなりさしけることにお
ぼれあへりかれ(句)こやよりはお紙かう無りくる
ともいとかたき紙せひまびてちかうけるいなる
べきこと紙なんこぞかり出たるとまてしたまへり
(昭名中文ん)さいの家にさしめしつけて中(芸)納云をかなし
をろかなるぞおもひほれてゐたるはげまとし
なべてせひがたうこそはこれもおぼさるらめと心
ぐるしがりなて二条院の西の(こい)屋まつたいなて
はぐもかよひなかべく思びて罪なひかれば(句ん)安一家の
れすまことよをて おぼしなるまやとおぼしなぐら

あげつるまじきはうれしくそのおふ姿なり。
さちくまと中納言も望まて三条の家にくりて
てゝにいまゝんと我さひし物我かれかたり
まるずしへてもこうべかりけるをなどひきへし
こうばそしこやのあげしよろめりしすぢもい
とまげなさことなさひもなれて大るのれう
もろこは我なしでいと誰かもとあげすとや

69038
6AP78